松任市

相川新遺跡

―県営ほ場整備事業御手洗・出城地区
相川新工区に係る発掘調査報告書―

1993

石川県立埋蔵文化財センター

松任市

相川新遺跡

―県営ほ場整備事業御手洗・出城地区
相川新工区に係る発掘調査報告書―

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は石川県松任市相川町に所在する相川新遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、石川県農林水産部耕地整備課施工の県営ほ場整備事業御手洗・出城地区相川新工区に関係して同課の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施したものである。費用は、石川県教育委員会・石川県立埋蔵文化財センターとの協議に基づく石川県耕地整備課の費用負担と、文化庁の補助金によるものである。事前協議および発掘調査の実施に関しては、石川県耕地整備課、石川県松任土地改良事務所、相川新工区工区長はもとより、地元の方々の協力を得た。記して感謝したい。

3　発掘調査は文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の保存に影響が生じる排水路設置箇所等に限定してその対象とした。田面部に存在する遺跡については、石川県立埋蔵文化財センターが実施した事前の分布調査をもとに、盛土工法の措置をとって現状保存をはかっている。

4　現地調査の期間、面積、担当者は次のとおりである。また、調査員として藤重　啓、中村繁和の協力を得た。

平成元年度調査　平成元年５月１日～同年６月12日　680㎡　垣内光次郎、川畑　誠

平成２年度調査　平成２年11月16日～同年12月14日　340㎡　垣内光次郎、冨田和気夫

5　出土遺物の整理作業は平成４年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。また資料整理、写真撮影、図版作成等の作業については、大藪智子、藤田美和子、長谷川啓子、越田洋子の協力を得た。

6　本書の編集は川畑が担当し、次のように分担して執筆した。

第１～３、５章　　川畑

第４章第１節　　垣内

第４章第２節　　冨田

7　本書における挿図等の扱いは次のとおりである。

(1)　挿図中で指示した方位はすべて真北である。また、断面図の水準線に付した数値は海抜高（単位ｍ）で表示している。

(2)　分担執筆としたため、特に用語等の統一はおこなっていない。

(3)　写真図版の出土遺物に付した番号は挿図の番号に一致する。

8　調査によって得られた資料（遺物、写真、スライド等）は、石川県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。貸出しを行っているので有効に利用していただきたい。

目　　次

第１章　位置と環境 …… 1

第１節　地理的環境 …… 1

第２節　歴史的環境 …… 1

第２章　調査の経緯と経過 …… 7

第１節　調査の経緯 …… 7

第２節　調査の経過 …… 8

第３章　平成元年度調査 …… 11

第１節　調査の概要 …… 11

第２節　東トレンチ …… 12

第３節　西トレンチ …… 17

第４章　平成２年度の調査 …… 25

第１節　調査の概要（第16図） …… 25

第２節　層序と遺構（第17～21図） …… 29

第３節　出土遺物 …… 31

第５章　まとめにかえて …… 37

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境

本書で報告する相川新遺跡は石川県松任市相川町地内に所在し、松任市の市街地中心部より西側約2.3kmに位置する。相川町を含む松任平野は全国的にも早場米の産地として知られ、一面に美田が広がる中に集落が点在する散村的な農村風景を色濃く残している。しかし、近年は企業の進出、また金沢市のベッドタウンとしての市街地の拡大等により急速にその姿を変えつつある。

第１図　松任市の位置

本遺跡周辺は、「白き神々の座」といわれる霊峰白山を源とする県下最大の河川、手取川の形成した扇径約12km、扇角約110°の扇状地の扇端部に位置し、北西側に緩やかな傾斜を示す。本遺跡周辺での標高は水田面で５～８ｍを測る。また西側約0.6kmには安原砂丘より続く海岸砂丘が残存し、その西側には日本海が広がっている。

本遺跡周辺の地形は、明治初年に編纂された『皇国地誌』の記述に「全土平野　四方田圃ニ続ク」とあり、おおむね平坦であったことが知られる。しかし、子細にみれば扇状地形の広がりに応じた微弱な高低地が複雑に連続し、微低地は手取川の分流およびその氾濫原、微高地は所謂「島状地形」とみることができる。本遺跡は第３図のとおり、水田の配列が変換する地点に近く、集落もその変換線上に点在することから、「島状地形」上に立地すると考えられる。また土壌については、やはり『皇国地誌』の「土色黒ク概ネ稲田ニ宜ク　東北湿地ニ属シ　西辺砂ヲ混ス」との記述より、安定した黒色土壌であり、相川町東北部（浜相川～野本あたり）には湿地帯が広がっていたようだ。古い時期に手取川が南遷し、氾濫の被害を被る可能性が低くなったことを考え合わせれば、比較的安定した地域といえ、以下に述べる遺跡の展開にも密接な関係をもつ。

第２節　歴史的環境

手取扇状地には、先述のとおり「島状地形」がいくつも連なる。そして、それぞれの「島状地形」を単位（ブロック）とするような遺跡群の展開が、過去の調査から判明している[(1)]。これと同様に、相川町周辺の遺跡も同一の微高地上に立地し、一つのブロック（相川ブロックと仮称する。）とみることができる。

本遺跡周辺は、昭和60年度以降の県営ほ場整備事業御手洗・出城地区の施工に伴い、分布調査および排水路部分の発掘調査が継続して実施されてきた（第３図）。その結果を時期別、また現海岸線からの距離で整理したのが第１表である。ただし、幅２ｍを基本とする小規模調査という制約から、個々の遺構・遺物間の詳細な検討、各遺跡内での調査区の位置付け、また遺跡相互の

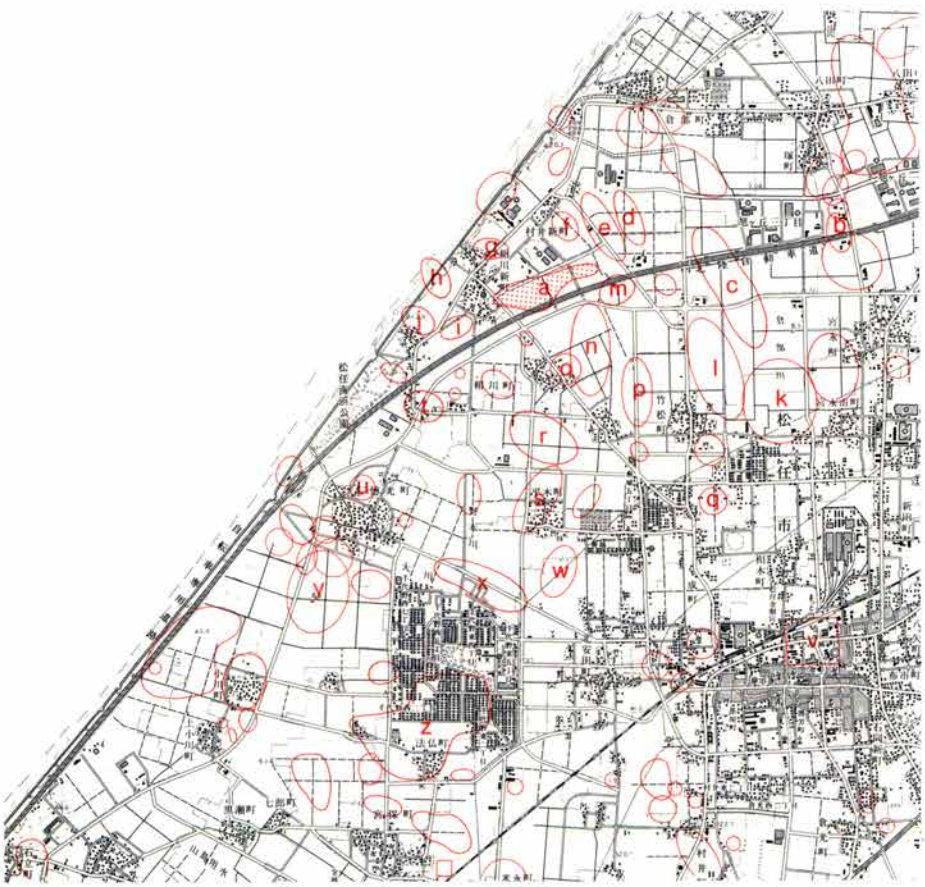
関係等を十分に整理しきれておらず、不明瞭な部分を多分に残す。以下、時代を追って遺跡の変遷を述べる。

縄文時代　後期以降に扇端部北西側（八田中遺跡、一塚遺跡等）、扇央部（長竹遺跡等）で集落が確認されるが、相川ブロックでは活動の痕跡は明確な形で現れてこない。ただし北安田北遺跡のような「短期間のキャンプ地的な」小規模の遺跡は存在する可能性を否定できない。

弥生時代中期前半以前　前代からの状況に大きな変化は認められない。南側約２kmに位置する徳光ジョウガチ遺跡で前期の遺物の出土をみるが集落としての継続性は認められず、引き続き扇端部北西側の地下水の自噴地帯を中心に集落が展開すると考えられる。

弥生時代中期後半　相川ブロックでも野本遺跡や相川新遺跡等のように人間の定住が確認でき、一つの画期といえるが、集落規模等不明な点が多い。

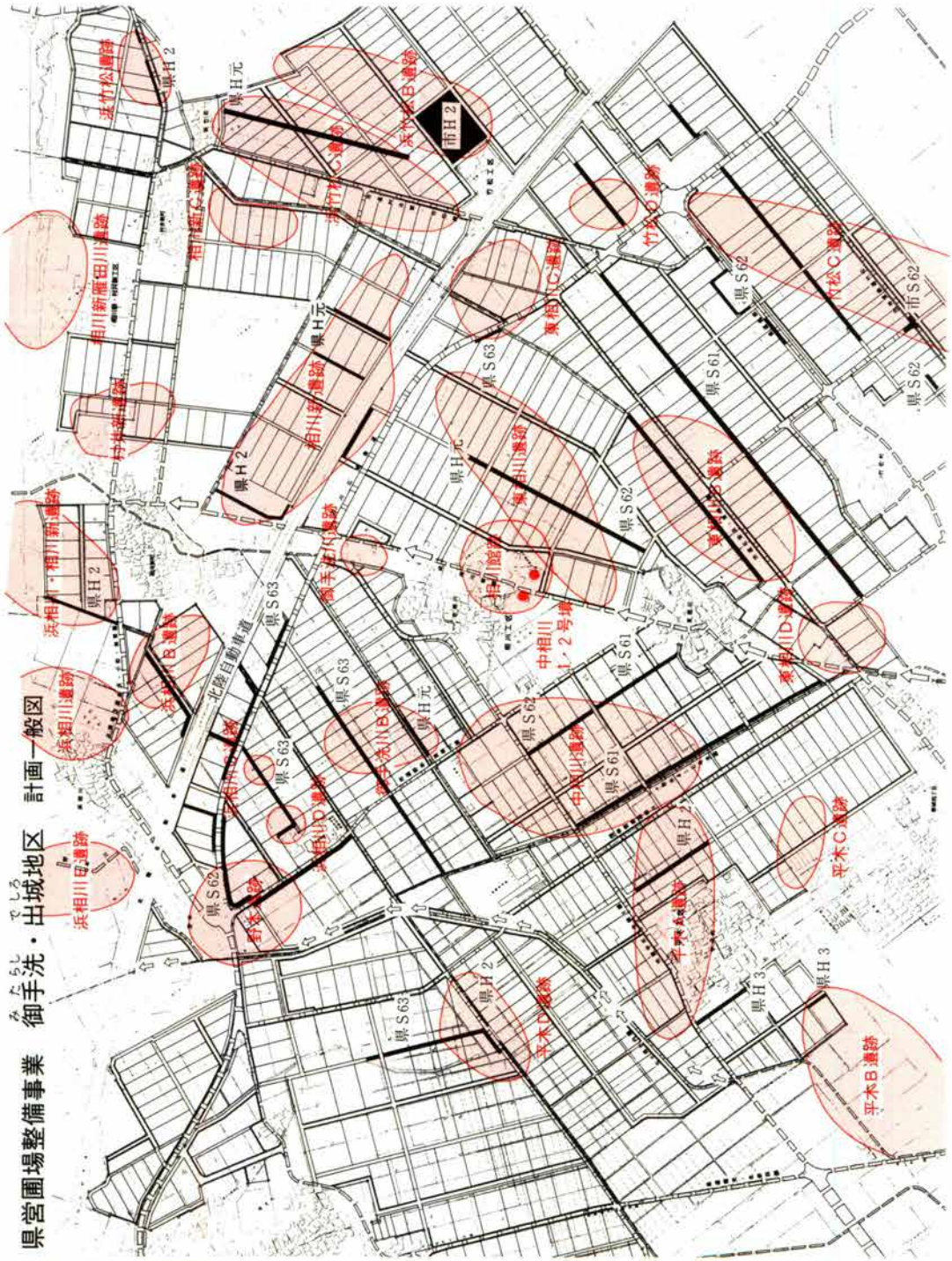
弥生時代後期　現海岸線から1.7km以内の地域で遺跡数が爆発的に増加、「ムラ」が群在する状況を呈する。この状況は、徳光町以北の扇端部全域で認められる現象と軌を一にしており、扇端部の低湿地地帯で本格的に農耕を開始した大画期と位置付けられる。本遺跡周辺でも中期後半より継続する集落に加え、新たに竹松Ｅ遺跡、東相川Ｂ遺跡、中相川遺跡等多くの集落が出現する。



a：相川新遺跡
b：旭遺跡群
c：竹松遺跡
d：浜竹松B遺跡
e：浜竹松C遺跡
f：相川新C遺跡
g：村井新遺跡
h：浜相川・相川新遺跡
i：浜相川B遺跡
j：浜相川遺跡
k：宮永市遺跡
l：竹松C遺跡
m：東相川C遺跡
n：東相川遺跡
o：相川館跡
p：東相川B遺跡
q：相木源波遺跡
r：中相川遺跡
s：平木A遺跡
t：野本遺跡
u：大和隼人館跡
v：松任城跡
w：平木Ｂ遺跡
x：北安田北遺跡
y：徳光ジョウガチ遺跡
z：法仏遺跡

第２図　相川新遺跡と周辺の遺跡位置図（Ｓ＝1/50,000）

弥生時代末～古墳時代初頭　後期に増加した遺跡が弥生時代から古墳時代への転換に伴い、集落の位置、規模、構造等で大きく転換する時期と考えられる。具体的には、後期の集落の間で何らかの質的な差異が生じたと考えられ、①後期で終焉する集落（竹松Ｅ遺跡等）、②弥生時代後期～末まで存続する集落（浜相川Ｂ遺跡等）、③弥生時代後期～古墳時代初頭まで存続する集落（中

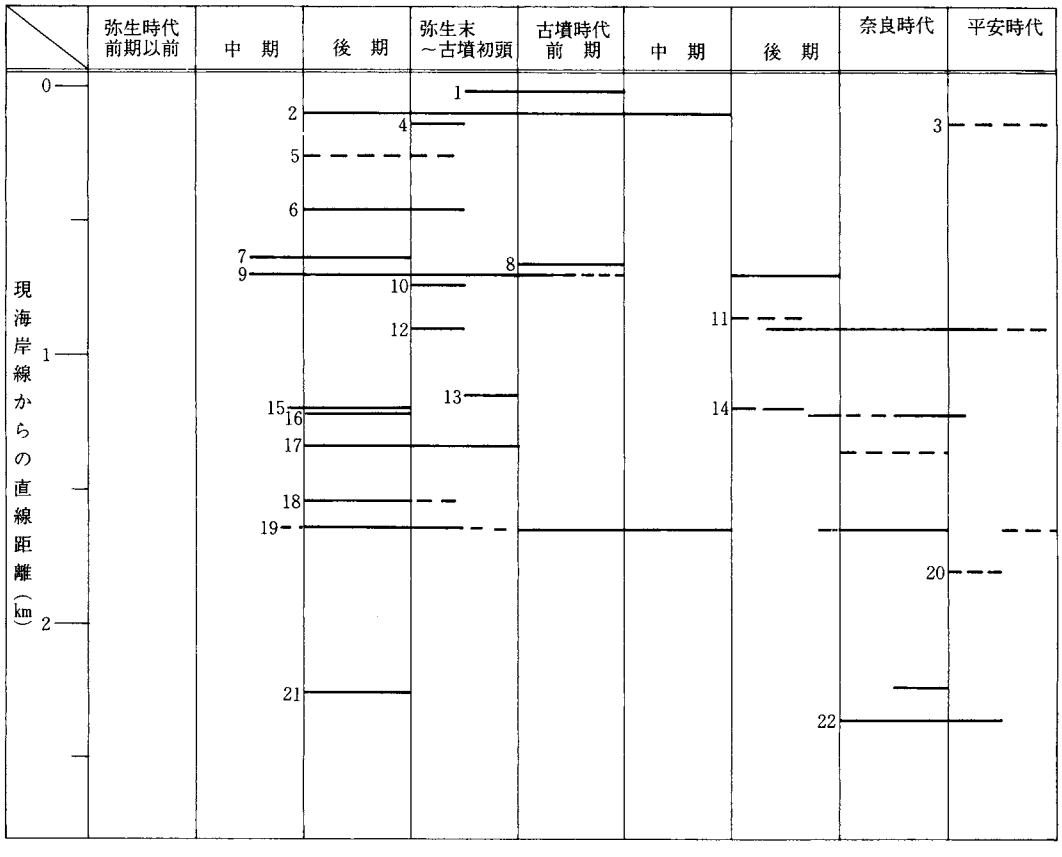


第３図　周辺の遺跡と既往の調査

相川遺跡等)、④弥生時代後期以降古墳時代前期まで営まれる中核的な集落（相川新遺跡、東相川Ｂ遺跡)、⑤弥生時代末に新たに成立する小規模・短期間の集落（御手洗川Ｂ遺跡等)、⑥古墳時代初頭に新たに成立し、以後も存続する集落（相川新雁田川遺跡等）というように少なくとも６タイプの集落の存続形態が確認される。また遺跡数からみれば、弥生時代後期に10遺跡、弥生時代末に８遺跡、古墳時代初頭に５遺跡と次第にその数を減じてくる。

この弥生時代末を中心とする転換期について、吉岡康暢氏[(2)]は「短期間・小規模」な集落が扇央・扇頂部を含めて爆発的に増加・拡散する現象を把え、大規模集落が解体、経営規模が縮小するが、あくまで不安定な小氾濫原の低湿地を耕地化したにすぎず、恒常的に管理する労働力の投入を想定することは困難だったと理解されている。しかし、相川ブロックでは先述のように後期

第１表　周辺の遺跡と現海岸線からの距離



No	遺　跡　名	調査年度	No	遺　跡　名	調査年度	No	遺　跡　名	調査年度
1	相川新雁田川遺跡	註(2)文献	9	相川新遺跡	1989～91県調査	17	中相川遺跡	1986. 87県調査
2	浜相川・相川新遺跡	1990県調査	10	浜相川Ｄ遺跡	1988県調査	18	平木Ａ遺跡	1990. 91県調査
3	村井新遺跡		11	御手洗川遺跡		19	東相川Ｂ遺跡	1986. 88県調査
4	浜相川遺跡	1989県分調	12	御手洗川Ｂ遺跡	1988. 89県調査	20	平木Ｃ遺跡	
5	浜相川Ｅ遺跡		13	東相川Ｃ遺跡	1988県調査	21	竹松Ｅ遺跡	1987県調査
6	浜相川Ｂ遺跡	1988県調査	14	中相川古墳群	註(2)文献	22	相木源波遺跡	1990市調査
7	野本遺跡	1987県調査	15	平木Ｄ遺跡	1988.90県調査			
8	浜相川Ｃ遺跡	1988県調査	16	東相川遺跡	1987.89県調査			

以降に継起的に多くの集落が営まれており、氏の考えられた状況を想定しずらい面もある。また、遺跡群内の展開が明らかとなっている竹松ブロック、横江ブロックと対比すれば、集落の分散・移動の在り方から弥生時代末の集落の展開に質的な相違を見いだすことも可能である。いずれにしても、これらの遺跡は有機的な関連をもち盛衰をみるわけで、現象の背景にある政治・経済・気象的な面をも視野にいれた慎重な検討が必要である。[(3)]

古墳時代前・中期　古墳時代初頭までの集落の移動が減少し、一つの地点で長期間存続する。また遺跡数も前期で５遺跡、中期で２遺跡と少なくなる。このようなことから、前期には拠点的な集落に再編・集約され、集落形態も上荒屋遺跡（前期、掘建柱建物77棟検出）のような「集村的形態」に転じたと想定できる。また、他地域と比較した集落数の少なさは、相川ブロックの停滞期とも把えられ、当期の古墳が未検出なことと無関係とは思われない。

古墳時代後期　後期前半には遺跡数は更に減少し、従来の集落が廃絶、新たな集落が成立するようだ。相川ブロックでは相川新遺跡のみが確認される。また並行した時期に中相川１．２号墳（円墳　径10～15ｍ）が存在し、本遺跡との関係が注目される。相川ブロックで新たな動きが確認できるのは、７世紀に入ってからである。以前よりの中核的集落である相川新遺跡が廃絶し、７世紀前半に東相川遺跡が成立、集落数が増加傾向をみせ始める。集落の立地は、前代からの相川新遺跡が従来の条件内にあるのに対して、新たに成立した集落は現海岸線の距離が1.5km前後と、扇央部に近づく傾向を示す。これは、扇状地開発の画期が７世紀代にあるとする従来の論と密接に関連すると考えられる。また、この動きと連動して相川ブロックの南側約1.5kmには、平安時代まで存続する北安田北遺跡が成立する。なお東相川遺跡は掘建柱建物のみで構成される集落（６棟検出）で、一般的な集落とは考えにくく、その性格が注目される。

奈良時代　７世紀末～８世紀初頭および後半代は、律令国家の展開により現海岸線から１km以上の扇央・扇頂部を含めた扇状地一帯に相次いで新たな集落が成立し、７世紀前半に続く大きな画期となる。相川ブロックでは相木源波遺跡（現海岸線より約2.3km）、竹松Ｅ遺跡等が確認される他、近接する地域では法仏遺跡（竪穴住居40余棟）、北安田遺跡等の以降の時代の中核的集落や中村ゴウデン遺跡等多くの集落が成立する。一方、扇端部（現海岸線より１km未満）では集落がほとんど展開せず、わずかに奈良時代末～平安初期の浜竹松遺跡が確認されるのみで、極めて対照的な様相を呈する。この大きな違いは、主に扇端部の低湿地地帯が律令国家の統一的な土地政策を実施されるに伴い、主に耕作域に利用されたことに起因すると考えられるが、その実態は不明である。

平安時代　前代よりの集落の立地傾向は継続する。相川ブロックに属する大半の遺跡は８世紀末もしくは９世紀代に廃絶し、後期にはほとんど集落が営まれなくなったようだ。これに対して、法仏遺跡、北安田北遺跡等の扇央・扇頂部の集落が活発な動きを示し、吉岡氏により、施行時期は不明なものの条里制の痕跡も確認されている。なお条里制についていえば、相川ブロックでは明治42年帝国陸軍作成の地図や発掘の成果から明瞭な形で認められず、先述の地理的要因の故に未実施地域だったとも考えられる。

また、本遺跡周辺は当初越前国、弘仁14（823）年の加賀立国後は石川郡に属する。10世紀前

半に編された『和名抄』の石川郡には八郷があげられており、浅香年木氏によれば遺跡周辺は椋部郷に属する。

中世　現在の中相川集落に重複して相川館跡（室町時代　五輪塔出土）がある他、発掘調査により散発的に遺物が出土するが、集落の動向は不明な点が多い。また文献から見れば、南北朝以降「相河」の村名が確認され、在地領主として相河氏が知られている。

以上、各時代の集落の変遷を追ってきたが、あくまで限られた小範囲の調査結果を統合的に推測したものである。本来、本遺跡の位置付けは他の遺跡群および扇央・扇頂部を含めたより広い視野の中でおこなうのが妥当であり、これは発掘調査をおこなった上での大きな責務といえる。本稿では、その一部も満たせなかったことを反省するとともに、今後の課題としたい。

註

(1)　安　英樹「竹松遺跡群の変遷について」『松任市竹松遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター　1992
　前田清彦『旭遺跡群発掘調査概報』松任市教育委員会　1990
　川畑　誠他『横江』石川県立埋蔵文化財センター　1992

(2)　吉岡康暢「総括　三浦遺跡調査の意義」『加賀三浦遺跡の研究』石川考古学研究会　1967

(3)　扇状地の集落の変遷で大きな画期を設定するなら、先述のように弥生時代後期に認められることに加え、弥生時代末の集落の大転換は県内全域にみられる現象で、より大きな政治的・経済的な動向を無視できない。また、当期は沿岸部の海岸砂丘が形成された時期（同時に気候も変動期？）であることが地質学の研究から明らかとなっている。中世の砂丘の形成が、金沢市普正寺遺跡等のように沿岸部一帯で集落が廃絶する現象を生じていることを考慮するならば、弥生時代末の集落の動向にも多大な影響を及ぼしていると想定できる。例えば、従来の耕地が飛砂等の影響で維持できず、わずかに残された、またはより条件の悪い耕作可能地を求めざるをえず、結果として集落が解体したとも考えられる。このように同時期の扇状地の集落の変遷については、自律的な動きか否かを含めた複合的な外的・内的要因が存在することを考慮に入れ、論ずる必要があると考えられる。

引用・参考文献

北野博司他『相川遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター　1992
前田清彦『松任市北安田北遺跡Ⅲ』松任市教育委員会　1990
前田清彦『松任市北安田北遺跡Ⅳ』松任市教育委員会　1992
小西昌志他『金沢市上荒屋遺跡概報』金沢市教育委員会他　1991

第２章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

県営ほ場整備事業御手洗・出城地区相川新工区は、松任市の北西部に位置し、昭和60年度に計画策定がなされた。事業の主管は石川県農林水産部耕地整備課であり、担当は石川県松任土地改良事務所である。事業対象地区は、明治後期から昭和初期にかけて一筆標準８haに田面の整理がおこなわれている。今回の事業計画は、現況の水田を一筆30haに大型化し、あわせて用排水路の分離、農道の整備をおこない、農地の集団化および大型機械の導入による労力の節減をはかること、また農業経営の近代化をおこない、農村環境の改善等をはかることを目的に実施された。

石川県立埋蔵文化財センターは、県内の県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財（以下、遺跡と記す）の保護に対して、事前に分布調査を実施し、遺跡が確認された範囲では、基本的に田面を盛土施工とし、遺跡が保護されるよう関係機関と協議を進めている。そして、やむをえず遺跡が影響を受ける排水路等についてのみ発掘調査を実施することで対応してきた。今回の事業地区に関しても昭和63年度以降、同様な協議・対応をおこない、田面は盛土による保護措置を取り、本書で報告するように排水路部分についてのみ発掘調査を実施した。

写真１　昭和63年度分布調査風景

第２節　調査の経過

(1)　平成元年度調査

相川新遺跡は、北陸自動車道建設に係り昭和44年度に発見された遺跡で、自動車道用地内については、同年度に試掘調査が実施されている。その結果、明瞭な遺構は検出されなかったものの古墳時代後期を中心とする時代の集落遺跡であることが判明していた。

今回の事業実施に際して、まず昭和63年度秋に、平成元年度事業実施予定地区約16haを対象とし、人力による試掘および踏査により分布調査を実施した。その結果、事業地区内で約８haにわたり、北陸自動車道に係り発見された遺跡の延びを確認し、関係機関と協議を進めた。そして、遺跡の存在する水田部は最低10㎝以上の保護層を確保した後に盛土工法による保護措置を取ること、遺跡が影響を受ける排水路部分２箇所計約680㎡については、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成元年５月１日～６月12日の期間で実施した。調査の結果、東トレンチでは鞍部、溝等を検出し、弥生時代中期後半～後期前半を中心とする時期の集落遺跡の縁辺部にあたると考えられる。また西トレンチでは弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居、溝、土坑

第４図　調査区位置図（S＝1/5,000）

等を検出し、やはり北陸自動車道関連調査で確認された集落と何らかの関連をもつ集落遺跡と考えられる。また遺物としては当期の土器の他に、調査区北側で中・近世の遺物が若干量出土していた。

なお、本遺跡は、従来「相川新A遺跡」の名称で呼んでいたが、昨年度の石川県遺跡地図の改定に伴い「相川新遺跡」の名称に統一された。本報告以後は「相川新遺跡」の名称を使用する。若干の混乱を生じることと思われるが了承されたい。また、北陸自動車道を挟んだ南側の排水路部分で同事業東相川工区に係わり、平成元年度に本遺跡の一部の発掘調査がおこなわれ(第3図)、古墳時代前期前葉および後期の集落を検出している。この調査の報告は『相川遺跡群』(埋文センター　1992) におこなわれているので御参照願いたい。

以下、調査参加者、調査日誌抄を記す。

《調査参加者》

職　員　平田天秋、垣内光次郎、川畑　誠

調査員　中村繁和、藤重　啓

作業員　上田美智子、木下成子、小西文雄、清水タミ、東みどり、東　陽子、藤田美和子、藤本春枝、藤本芳枝、松原美智子、松本初枝、村井静子、村西良雄、山　静子、山　信子

《調査日誌抄》

5／1　発掘機材準備作業。

5／12・13　重機による表土除去作業。基準杭設定作業。

5／16～19　東トレンチ包含層掘り下げ、遺構検出および遺構掘り下げ作業。

5／22　東トレンチ遺構掘り下げ作業。写真撮影作業。

5／23～26　東トレンチ図面作成作業。西トレンチ包含層掘り下げ作業および遺構検出作業。

5／29～31　東トレンチ図面作成作業。西トレンチ1～8区遺構検出、掘り下げ作業。

6／1　西トレンチ9～16区遺構検出、掘り下げ作業。

6／2　西トレンチ1～3区図面作成作業。2～16区写真撮影作業。

6／5・6　西トレンチ断面図作成作業。遺物取り上げ作業。

6／7～12　西トレンチ平面図作成作業。

(2) 平成2年度調査

平成2年度調査区は、平成元年度調査区の南側約300mの地点に位置する。同年度事業実施予定地区約9.3haを対象として、平成元年秋に重機による試掘および踏査により分布調査を実施した。その結果、事業対象地区南側で昨年度よりの遺跡の延びが約3haにわたり確認された。この結果をもとに、前年度と同様な協議・対応をおこない、遺跡が影響を受ける排水路部分約340m²を対象として発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成２年11月16日～12月14日にかけて実施された。その結果、弥生時代後期後半～古墳時代の遺構群を検出した。中でも弥生時代に位置付けられる埋甕が確認され、注目される。

以下、調査参加者、調査日誌抄を記す。

《調査参加者》

職　員　垣内光次郎、冨田和気夫、川畑　誠、安　英樹

調査員　藤重　啓

作業員　打木喜美江、川向好子、北川百合子、斎田寿子、沢野文栄、西野　翠、東美佐子、東　陽子、藤本春枝、山　静子、山　信子、山田高子

《調査日誌抄》

11／16　プレハブ建て上げ、機材搬入作業。

11／19　重機による表土除去作業。

11／20～22　排水作業。Ｎ区６～12区の包含層掘り下げ作業および遺構検出作業。

11／27～29　Ｎ区１～６区の包含層掘り下げ作業。

11／30～12／５　Ｎ区１～６区の包含層掘り下げ作業と遺構検出、掘り下げ作業を続行する。

12／６・７　Ｎ区１～６区図面作成作業。Ｓ区の包含層掘り下げ作業。

12／10・11　Ｎ区７～12区図面作成作業。ＳＥ区基準杭打ち作業。落ち込み部分掘り下げ作業。

12／12・13　ＳＥ区図面作成作業。ＳＥ・Ｓ区写真撮影作業。

12／14　Ｎ区１～14区写真撮影作業、遺物取り上げ作業。土層柱状図作成作業。機材撤収。

第３章　平成元年度調査

第１節　調査の概要

平成元年度調査は、事業予定地内の排水路予定部分２箇所を対象におこなわれた。調査は平成元年５月１日～６月12日にかけて実施し、対象面積約680m²（幅約２ｍ×延べ長さ約340ｍ）を測る。

相川新遺跡は県下最大の手取扇状地の扇端部に位置する。周辺の地形は南々西から北々西に向けて緩やかに傾斜し、事業実施前の水田面で5.60～5.00ｍの標高を測る。また調査区北端から日本海までは直線で約500ｍの距離にある。なお、扇状地特有の「島状地形」は、過去の耕地整理や耕作等により地表面がかなり削平を受けているため、現状では明瞭に観察できない。

調査区は、その位置からそれぞれ東トレンチ、西トレンチと呼称することにした（第５図）。

東トレンチは長さ約170ｍを測り、調査区南端に任意に設定した基準杭より、10ｍ毎に北側へ１～17区に区割りをおこなっている。また、調査区主軸線は予定排水路中心線と一致し、N-25°-Wの方位をとる。調査の結果、１～12区にかけて鞍部１箇所、溝２条、土坑３基等が点在して検出された。出土遺物から弥生時代中期後半～後期および古墳時代後期を主体とする時期

第５図　平成元年度調査地区位置図（Ｓ＝1/3,000）

の集落遺跡の縁辺部と考えられる。

次に西トレンチは長さ約165mを測る。東トレンチと同様に、調査区南端に任意に設定した基準杭より10m毎に北側に向け、1～17区に細分した。調査区主軸方位は東トレンチと同じである。調査の結果、6～13区にかけて竪穴住居2棟、溝3条、土坑3基等を検出した。出土遺物から、弥生時代後期および古墳時代後期を主体とする時期の集落遺跡と考えられる。

第2節　東トレンチ

(1) 土層層序（第6図）

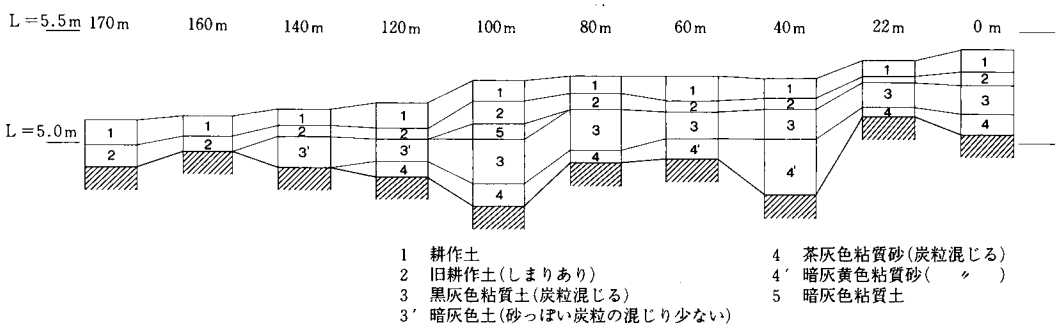
基本土層層序は、上層から第1層耕作土、第2層旧耕作土、第3層包含層（黒灰色粘質土）、第4層包含層と地山との漸移層（茶灰色粘質砂）、第5層地山土（黄灰色砂質土）となる。地山面までの土砂の厚さは約25～55cmを測り、調査区北側に向かうにつれ、次第に厚さを減じるとともに、第3層は砂質化し、160m以北では第3．4層が確認できなくなる。また地山面は、基本的に南側から北側に向けて傾斜しているが、100～120m付近で若干低くなる。なお、地山面の土質は基本的に黄灰色砂質土であるが、短い間隔で扇状地特有の細かい変化をみせる。南側から順に0～30m付近までは砂質土、30～60m付近ではアン部に対応して粘質化、60～100m付近で再び砂質土、100～120m付近で粘質化、130m付近より粗砂が混じり、145m以北では砂利層となる。

(2) 遺構・遺物（第8・9図）

12区以南で鞍部1箇所、溝2条、土坑3基、ピット等を検出した。全般に遺構の分布はそれ程密ではなく、弥生時代中期後半～後期を主体とした遺物がパンケースで1箱程度出土したにとどまる。また遺構として、以下に記述する以外は深さ5～10cm前後の不定形な落ち込みであり、地山の単なる起伏と考えられる。なお、13区以北は先述のように地山土が大きく変化し、遺構も検出できなくなり、遺跡の中心部から次第に離れていくと考えられる。

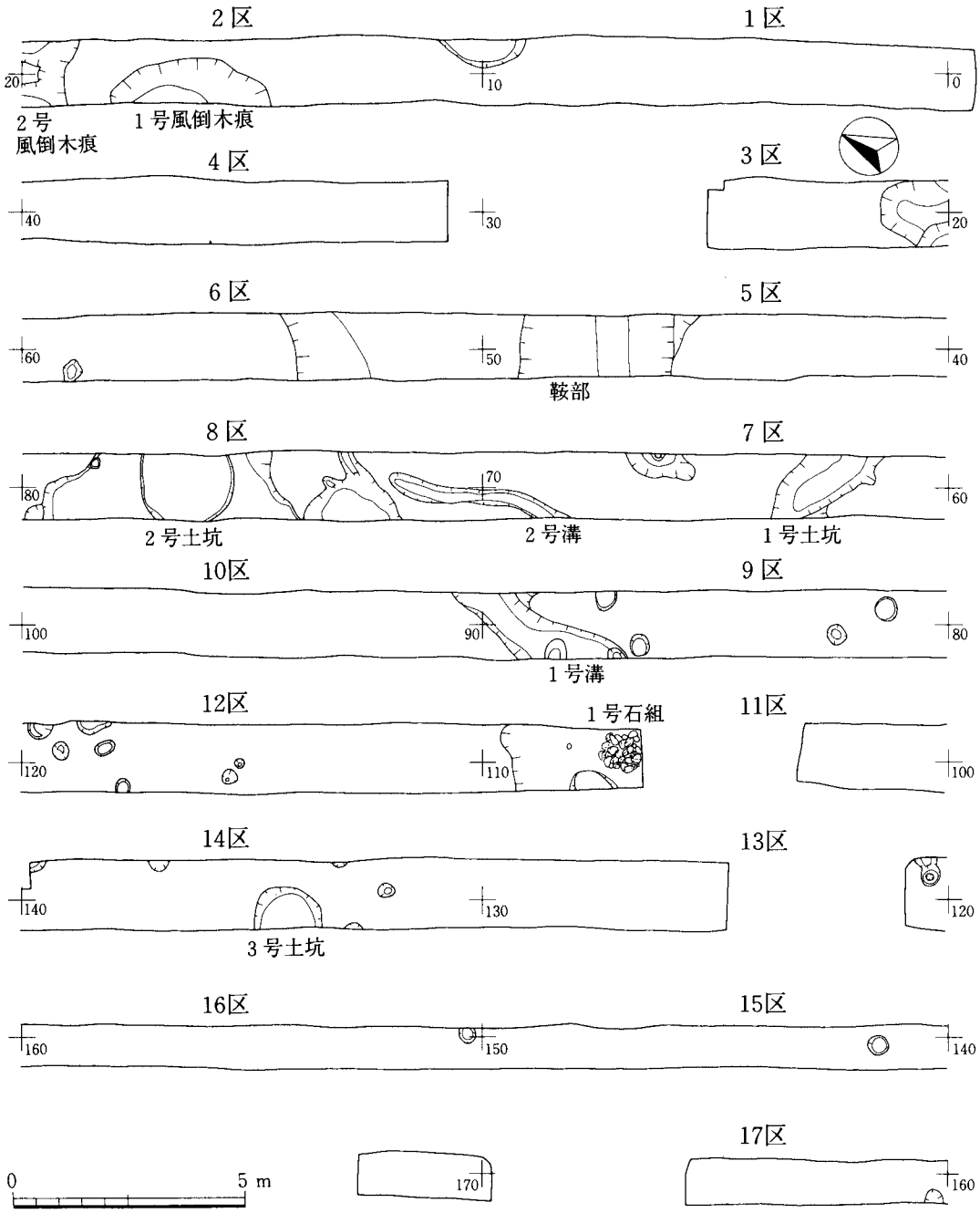
鞍部

調査区にほぼ直交して検出した弥生時代中期後半の遺構で、東壁で幅約910cm、深さ約50cmを測る。覆土の堆積状況から河川跡の可能性をもつ。南側肩部に対して北側肩部は中途で傾斜を変えながら緩やかに立ち上がる。覆土は50m地点で上層より黒灰色粘質土、植物遺体の混じる黒灰

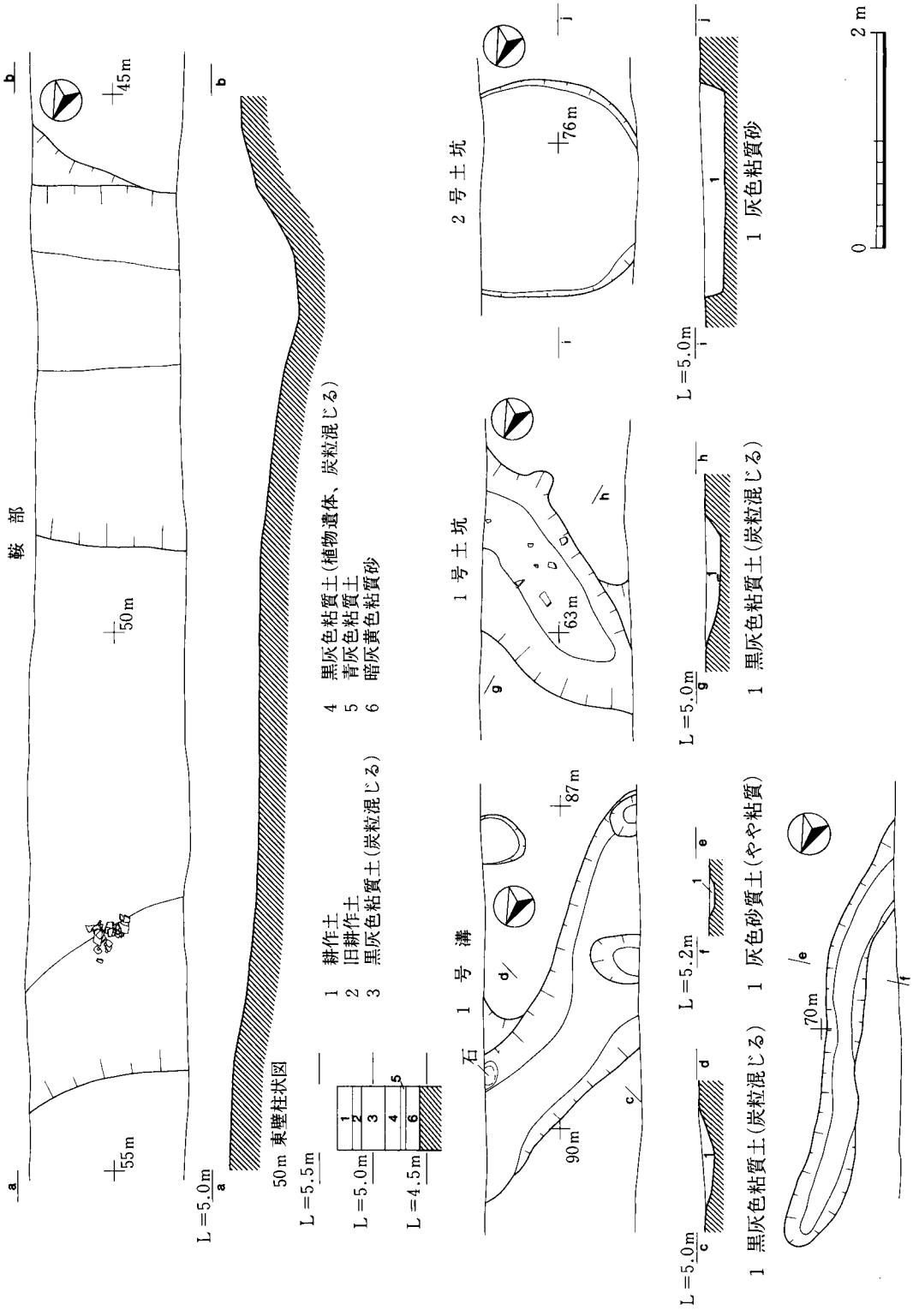


第6図　東トレンチ東壁土層柱状図

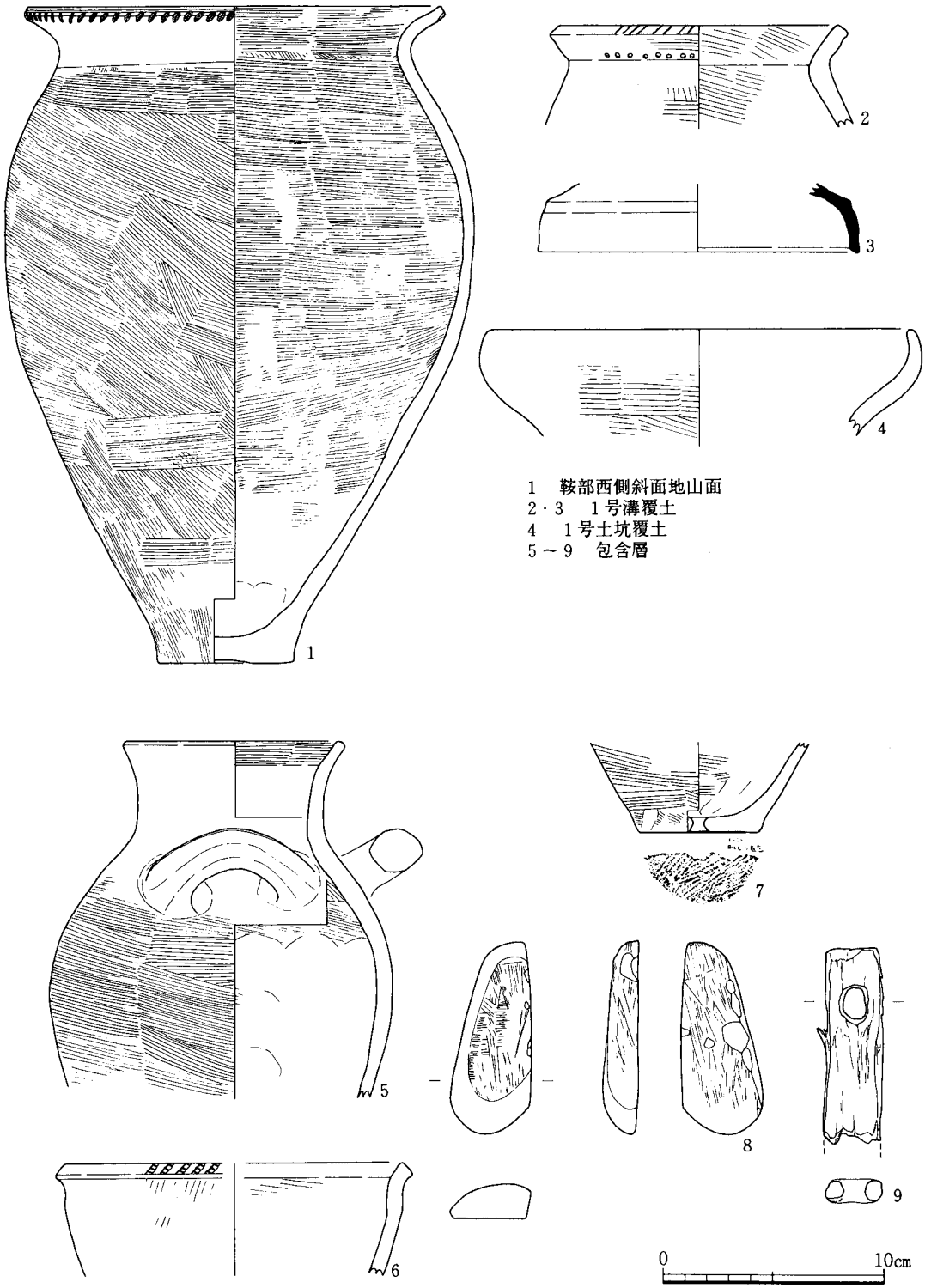
色粘質土、青灰色粘質土、暗灰黄色粘質砂となる。53m付近の地山面で、1個体分の弥生時代中期後半の甕が出土した。第9図1は浅黄橙色を呈し、口径19.0cm、器高30.5cmを測る。胴部は上半で最大径21.1cmをとり、腰高な印象を受ける。頸部からゆるやかに外反し、口縁端部を平坦に仕上げる。胴部内外面とも、縦方向の後に横方向のハケ調整を施す。口縁部は1条の凹線を加えた後、斜め方向の刻みを入れる。また胴部外面底部より1/3～2/3付近に煤が、底部内面には煮沸



第7図　東トレンチ全体図（S＝1/150）



第8図　東トレンチ遺構実測図（S＝1/60）



第9図　東トレンチ出土遺物実測図（S＝1/3）

によるヨゴレが付着する。なお、1以外に遺物は出土していない。

1号溝

9区で検出した古墳時代後期の浅い溝である。幅90～110㎝、深さ約12㎝を測り、東西方向に、屈曲しながら流れるようだ。覆土は黒灰色粘質土の単層である。覆土より遺物が出土した。第9図2は弥生時代中期後半の甕である。口径12.6㎝を測り、器肉は厚い。内外面とも粗いハケ調整を施し、口縁端部に斜方向の刻みを、また頸部に列の乱れた刺突文を加える。色調はにぶい淡橙色を呈し、2㎜大の砂粒を含む。3は口径14.6㎝を測る須恵器坏蓋で、天井部外面および口縁端部の稜は鋭さを欠く。胎土より非在地産と考えられ、MT-15型式並行期に位置付けられる。

2号溝

7・8区で検出した。幅40㎝前後、深さ約5㎝を測り、覆土は灰色砂質土の単層である。出土遺物はないが、覆土の土色より新しい時期の遺構と考えられる。

1号土坑

7区で検出した弥生時代中期後半の不定形な土坑である。東西方向に主軸をとり、深さ約15㎝を測る。覆土は黒灰色粘質土の単層で底面近くより遺物が出土した。第9図3は弥生土器壷口端部で、口径19.6㎝を測る。頸部からなだらかに湾曲し、口縁端部は丸く仕上げる。内外面とも粗いハケ調整の後、口縁部のみナデ調整を加える。胎土中に海綿骨針を含む。他に甕片が出土した。

2号土坑

14区で検出した略円形の土坑で、径約200㎝、深さ約20㎝を測る。底面は平坦で、壁はしっかりと立ち上がる。覆土より近代瓦片と錆び付いた鉄片が出土し、近世以降に位置付けられる。

1・2号風倒木痕

2区で検出され、1号風倒木痕で深さ約60㎝、2号風倒木痕で深さ約30㎝を測る。覆土はともに黒灰色粘質土で、少量の遺物が出土した。

1号石組

11区107ｍ付近で方形に石組が確認された。一辺約80㎝を測り、20～30㎝大の河原石を外側に配した後、内側に詰める。また下部遺構は検出できなかった。黒灰色粘質土を切って掘られることから、新しい時期のものと考えられる。単に地山内の河原石を廃棄したものとも考えられる。

包含層出土遺物

少量の弥生時代中期後半～後期および古代、中世の遺物および中世以降の管状土錘が調査区より散発的に出土した。5～7は弥生時代中期後半の土器と考えられる。5は14区から出土した水差し形土器である。口径10.0㎝を測り、なで肩の肩部に面取りされた把手をつける。色調は黄橙色で外面全体に煤が付着する。6は鉢である。口径約15㎝を測り、口縁部はやや外反する。内外面ともハケ調整の後、外面に不明瞭ながらミガキ調整を加えるようだ。また口縁端部に斜方向の刻みを施す。色調はにぶい淡橙色を呈し、胎土中に微砂粒を含む。7は甕底部で焼成後、底部に両側から穿孔をおこなう。また底部外面にもハケ調整が施される。8は淡緑灰色を呈した砥石で、全面が研ぎに使用されている。61gの重さを測り、石材は凝灰岩質頁岩である。9は木製品で、略方形の穴が穿たれる。

第3節　西トレンチ

(1) 土層層序（第10図）

基本土層層序は、上層から第1層耕作土、第2層旧耕作土、第3層床土、第4層包含層（黒褐色粘質土）、第5層地山土（黄灰色砂質土）となる。土砂の堆積は安定しており、地山面までの厚さは約35～50cmを測る。また包含層は、6区以南では過去の耕地整理等による削平のため、ほとんど存在せず、100m以北では植物遺体が多く混じり、純粋な包含層とはいえなくなってくる。地山面は基本的に南側から北側に向けて傾斜し、その土質は東トレンチが複雑に変化するのに対して、ほとんど変化はない。なお、118～131mにかけては、調査区東壁に沿って、暗渠としてモミガラが埋められていたため、土層を知ることができなかった。

(2) 遺構・遺物（第11～15図）

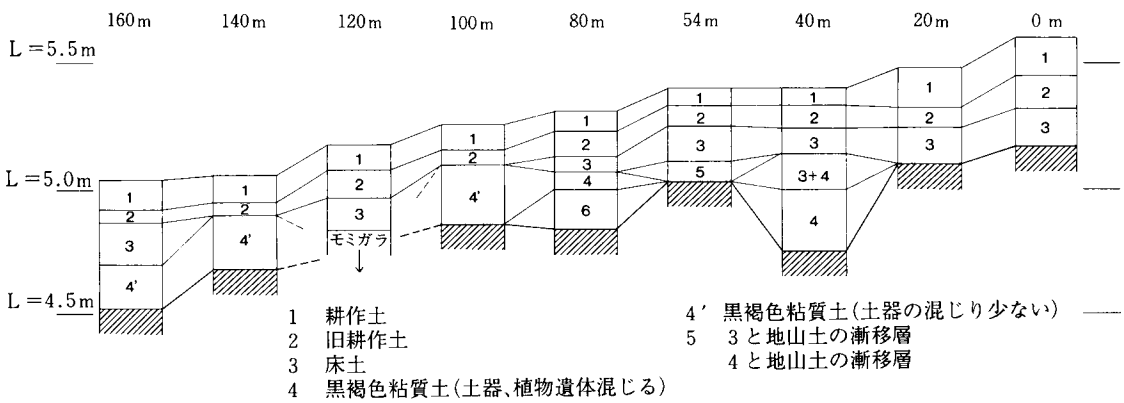
6～12区にかけて竪穴住居2棟、溝4条、土坑3基、ピット等の遺構が検出された（第11図）。全般に過去の耕地整理等の削平を受けているため、遺構の残り具合がよくない。中でも66～68m付近にかけては、明確にプランを確認することが困難であった。また、5～10区にかけて弥生時代後期および古墳時代後期を主体とする時期の遺物が出土し、その量はパンケースで3箱程度を数える。なお、第11図等に見るとおり、調査区内で調査区主軸線に並行して、コンクリート製の畦畔ブロックが敷設され、その部分は損壊を受けている。

1号竪穴住居

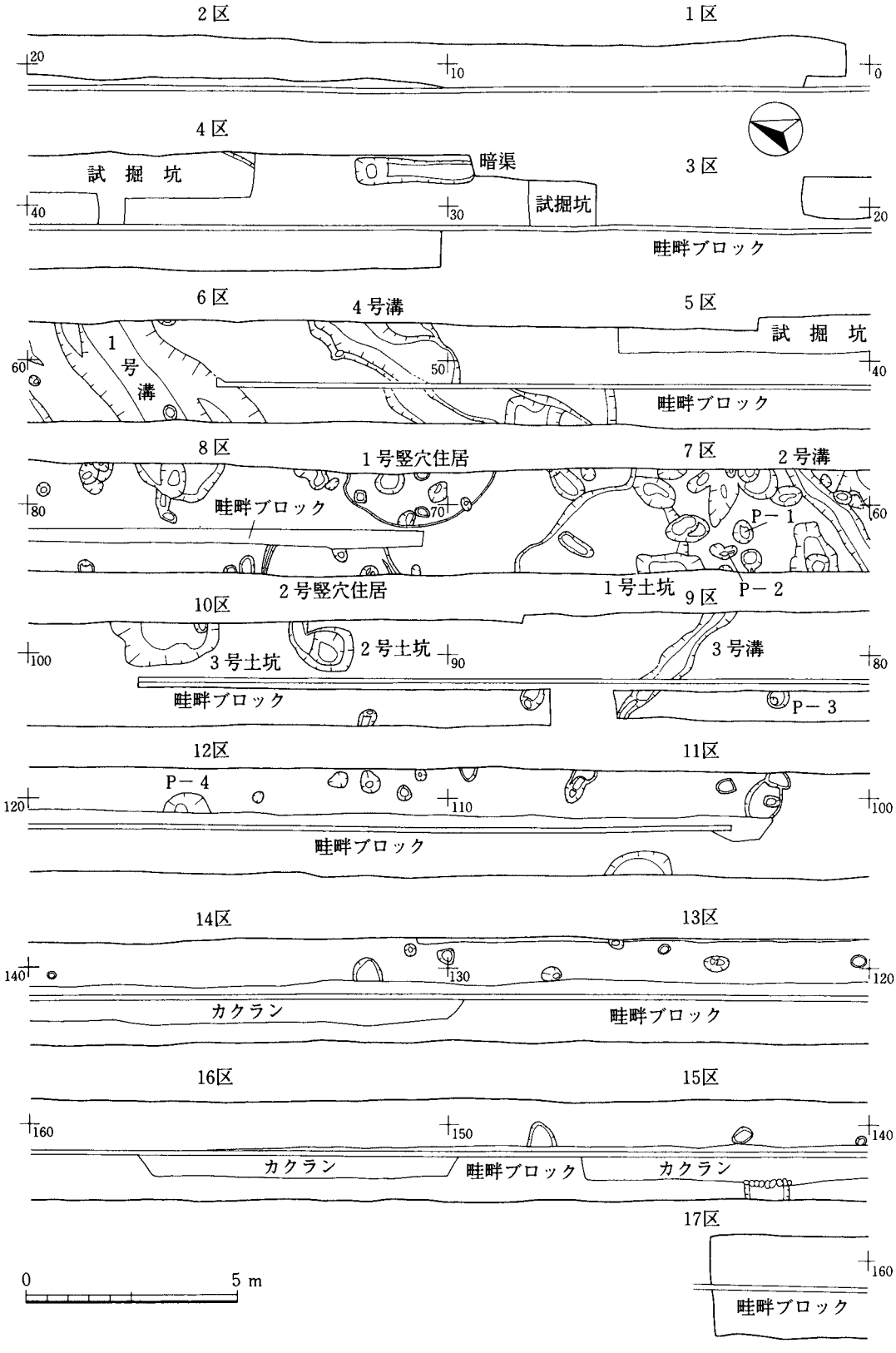
70m付近で検出し、上半はかなり削平を受けている。調査区東壁で幅約360cm、深さ約10cmを測り、覆土は暗灰色シルトの単層である。またピットは深さ6～14cmを測る。覆土より弥生時代後期と思われる甕片が少量出土し、2号竪穴住居とほぼ同時期の遺構と考えられる。

2号竪穴住居

72m付近で検出し、明確ではないものの弥生時代後期の遺構と考えられる。調査区東壁で幅約330cm、深さ約5cmを測り、上半はかなり削平を受けている。また壁に沿って床面に深さ約6cm



第10図　西トレンチ東壁土層柱状図



第11図　西トレンチ全体図（S＝1/50）

の浅い溝が掘られている。覆土は暗灰色シルトの単層である。第14図10は床面から出土した弥生時代後期の有段口縁の甕で、口径28.0cmを測る。口縁部は外傾し、外面に煮沸によるヨゴレが付着する。2mm大の粗い砂粒を含む。他に弥生時代後期の甕小片がピット中より出土した。

1号溝　6区で検出した古墳時代後期の溝で、北方向やや東にふれて流れる。幅210～240cm、深さ約30cmを測り、覆土は上層から黒褐色粘質土、淡灰色粘質砂、暗灰色シルトとなる。底面を中心に遺物が出土した。第14図11はにぶい黄橙色を呈した土師器甕で、口径13.8cmを測る。短く外傾する口縁部は、先細りとなる。胎土中に粗い砂粒を含む。12も土師器甕で口径10.8cmを測る。胴部は器肉が厚く、肩部はハケ調整の後ナデ調整を加えるため、やや鋭角的に屈曲する。外面に煤付着。13.14は内面黒色の土師器である。13は椀で口径14.0cmを測る。淡黄灰色を呈し、身の深い印象を受ける。胎土中に1mm大の砂粒を含む。15.16は須恵器である。15は淡灰色の坏蓋で器高4.8cm、口径14.8cmを測り、天井部に幅が広く粗い回転ケズリ調整を全体に施す。稜はあまり目立たず、沈線により表現し、TK-10型式並行期と考えられる。16は淡灰色の高坏で、口径12.4cmを測り、立ち上がりは内傾する。坏部内面中央付近がやや滑らかとなり、使用痕と考えられる。TK-209型式並行期か。ともに胎土から南加賀産である。

2号溝　7区で検出し、1号溝と並行して流れる。幅約60cm、深さ約8cmを測り、覆土は暗灰色弱粘質土である。出土遺物はないが、1号溝とほぼ同時期のものであろう。

3号溝　9区で検出し、東西方向に流れる。幅30～80cm、深さ6～20cmを測り、覆土は黒褐色粘質土の単層である。出土遺物はない。

4号溝　6区で検出した。上半がかなり削平を受け、肩部の乱れが著しい。南北方向に流れると思われ、深さ約20cmを測る。覆土は上層から粘性をもつ淡灰色シルト、淡灰黄色シルトとなり、古代以降のかなり新しい時期に属すると考えられる。明確な出土遺物はない。

1号土坑　7区で検出し、やや崩れた方形を呈すると思われる。調査区西壁で幅約160cm、深さ約30cmを測る。覆土は黒褐色粘質土の単層で、古墳時代の土師器甕小片が出土した。

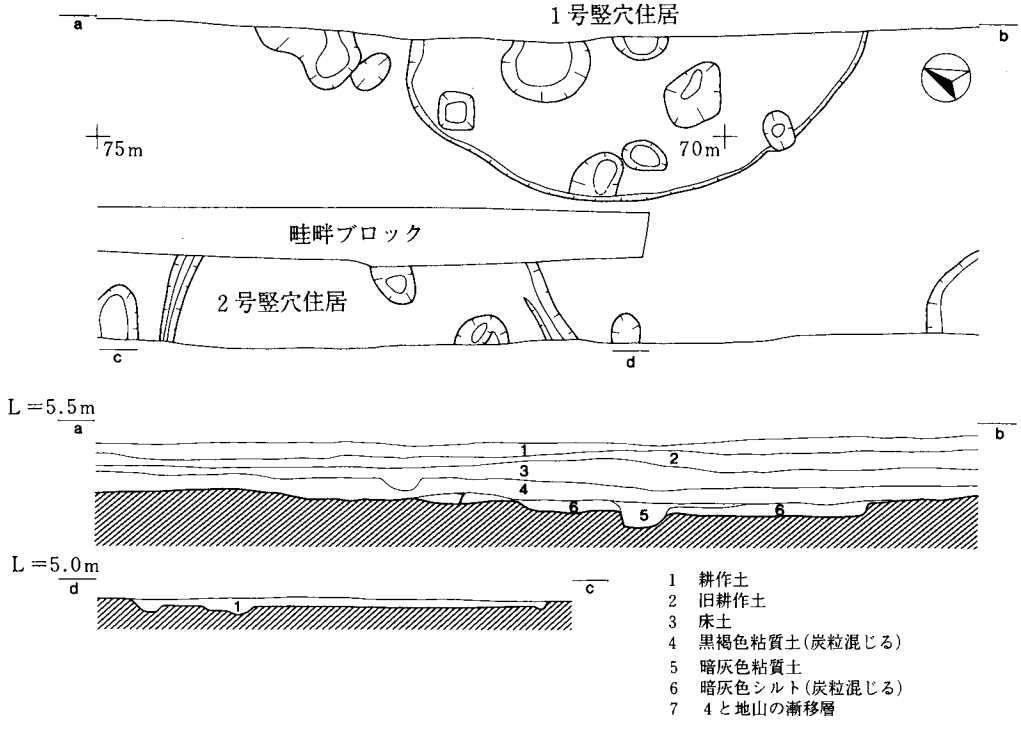
2号土坑　10区で検出した。やや崩れた方形を呈し、東側に浅い溝がつく。一辺約100cm、深さ約20cmを測り、覆土は黒褐色粘質土である。覆土より遺物が出土した。第14図17は弥生時代後期の高坏で口径18.1cmを測る。口縁端部を平坦に面取りし、内面にミガキ調整痕が残る。色調は浅黄橙色で、胎土に微砂粒を含む。18は古墳時代の土師器高坏脚部で、外面はミガキ調整の後、装飾状にハケを加える。胎土中に海綿骨針を含む。

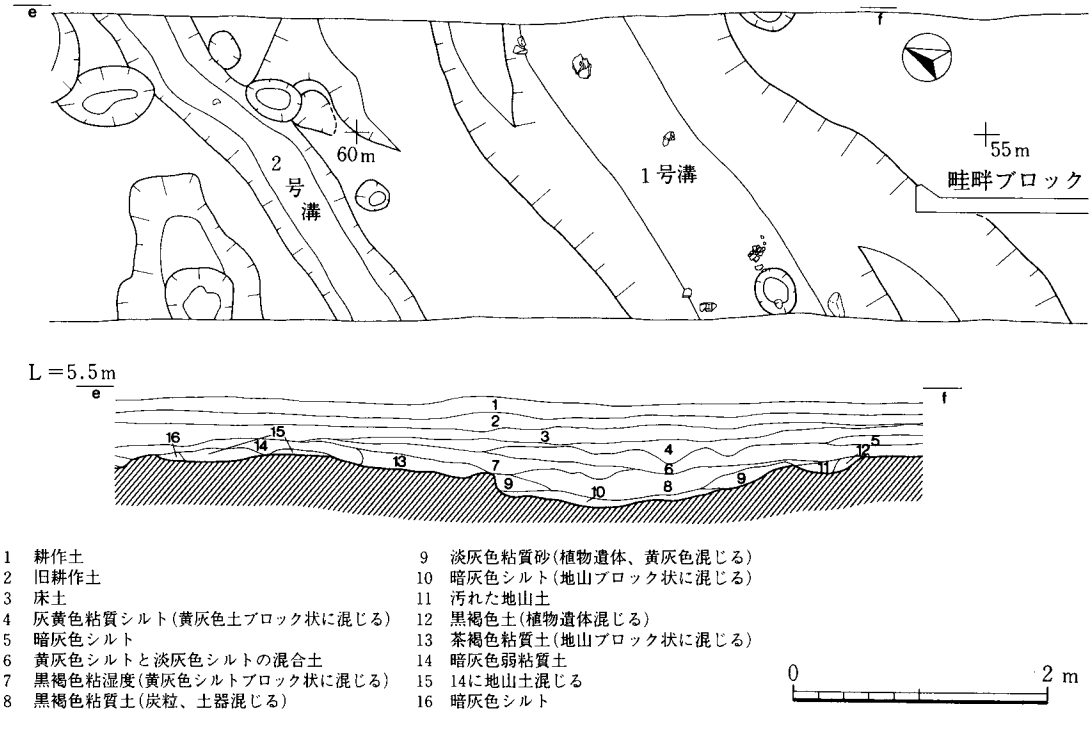
3号土坑　10区で検出し、上半はかなり削平を受けている。崩れた方形を呈し、調査区東壁で幅216cm、深さ約10cmを測る。覆土は黒褐色粘質土で、下方は砂っぽくなる。出土遺物なし。

3号ピット　9区で検出した。円形を呈し、中央部はすり鉢状にくぼむ。径約50cm、深さ約35cmを測り、覆土は黒褐色粘質土である。覆土より弥生時代後期の甕が出土した。第14図19. 20はともに灰褐色を呈し、2mm大の粗い砂粒を含むことから同一個体と考えられる。19は口径12.8cmを測り、口縁部はやや外反する。20の底部外面はくぼむ。

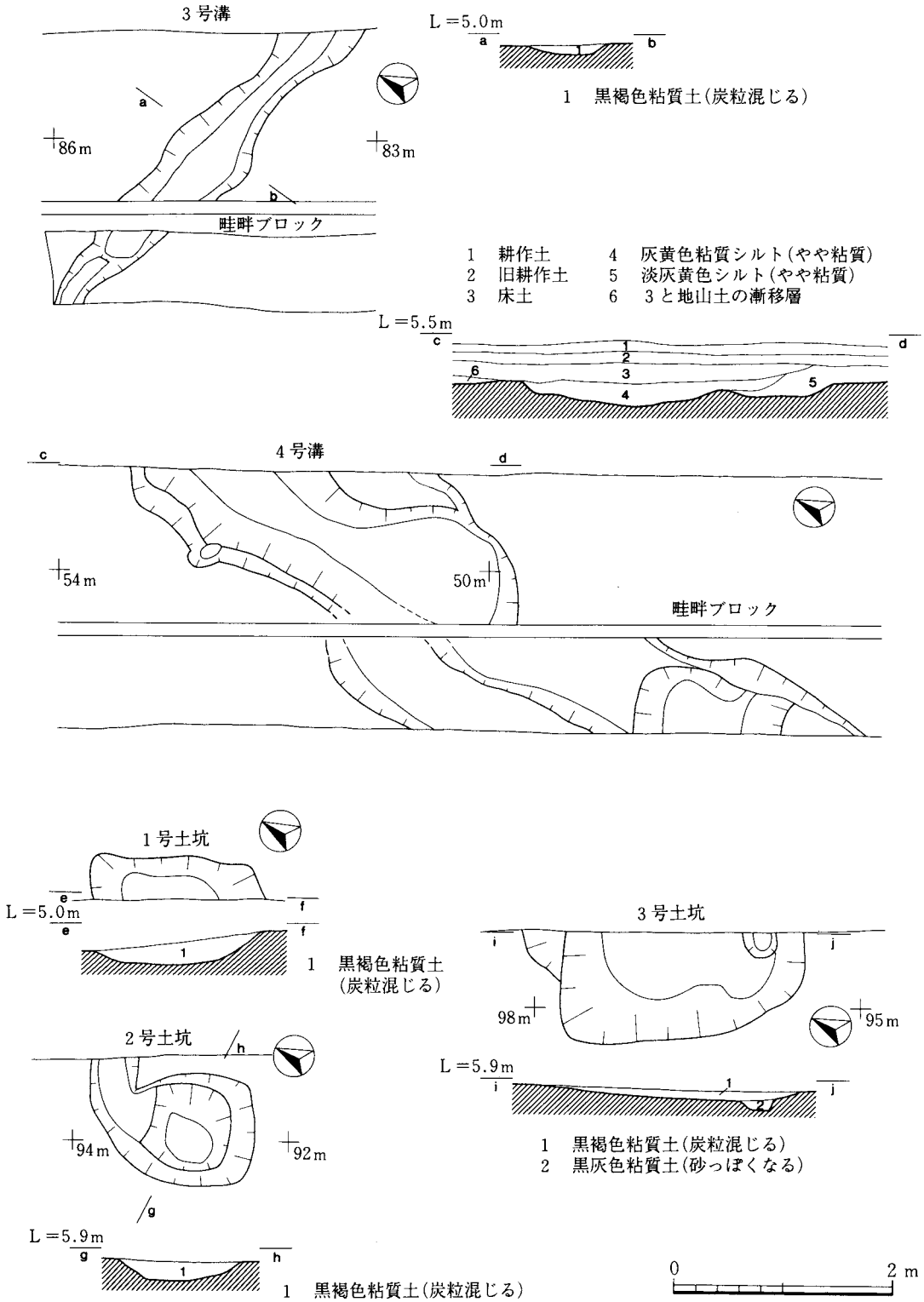
包含層出土遺物

5～10区にかけて、弥生時代後期・古墳時代後期～中・近世の遺物が出土した。特に5～7区

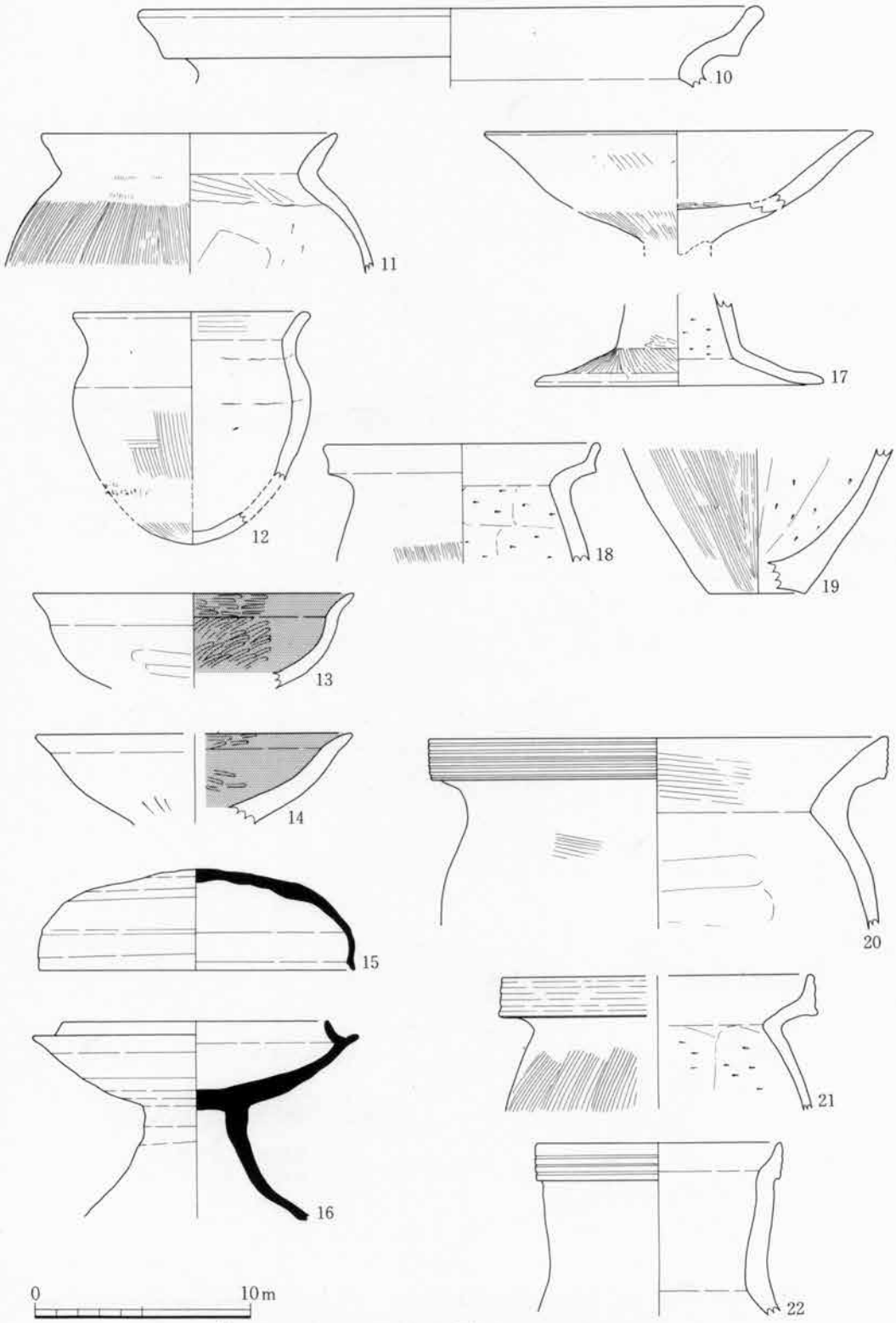




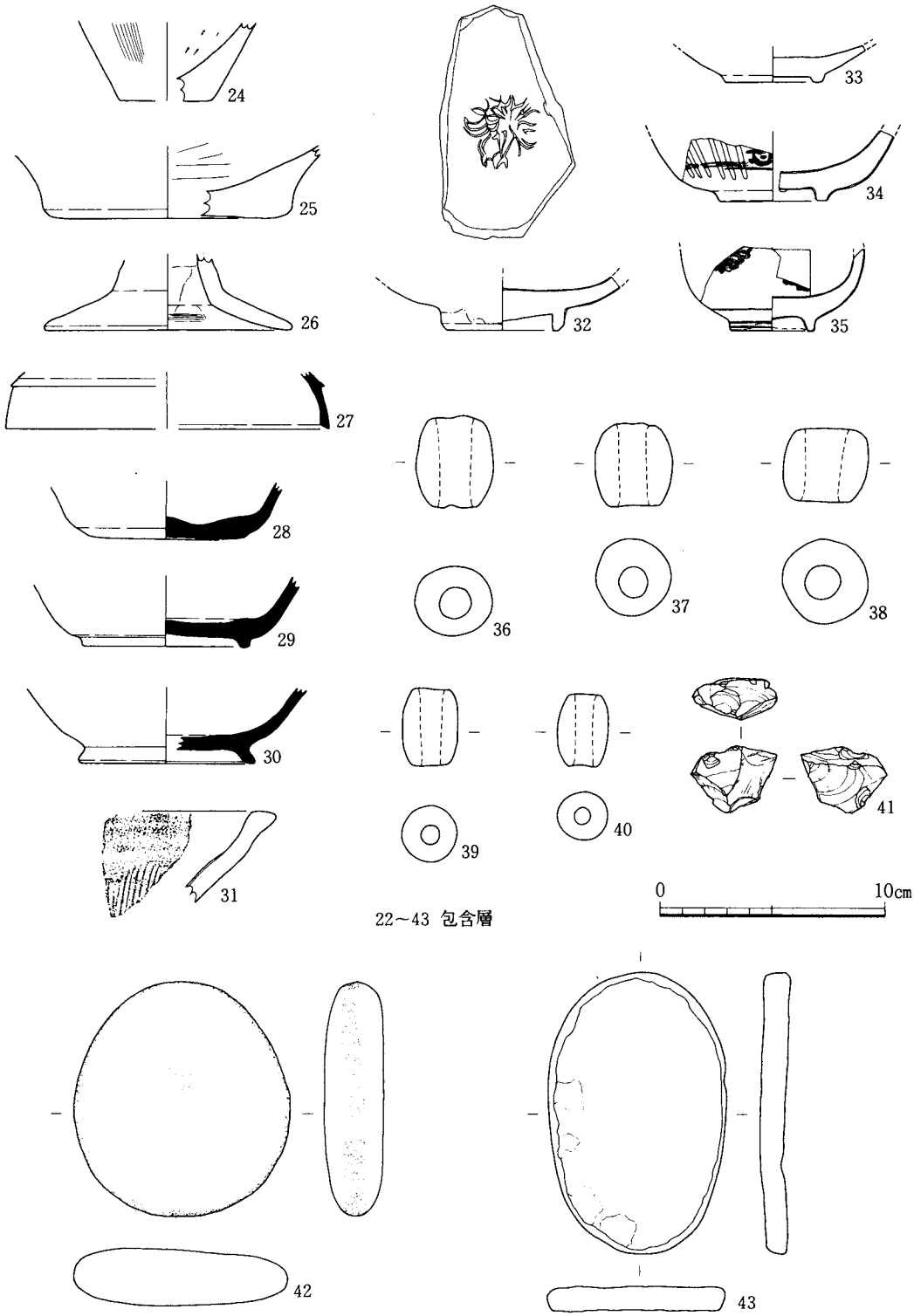
第12図　西トレンチ遺構実測図(1)（S＝1/60）



第13図　西トレンチ遺構実測図（S＝1/60）



第14図　西トレンチ出土遺物実測図(1)（S＝1/3）



第15図　西トレンチ出土遺物実測図(2)（S＝1/3）

にかけては弥生時代、中・近世の遺物が集中する。また、1～5区および11区以北ではほとんど遺物が出土せず、遺跡の中心部から離れるようだ。第14図21．22は弥生時代後期の甕である。21は口径21.4cmを測る。口縁部の器肉はかなり厚く、胴部外面は細かいハケ調整、内面はナデ調整を施す。口縁部に煮沸によるヨゴレが付着する。22は口径15cm前後を測る。ともに粗い砂粒を含む。23は中期後半の壷と考えられる。浅黄橙色を呈し、口径11.4cmを測る。肩部からゆるやかに屈曲しながら立ち上がり、口縁帯外面に3条の凹線を加える。胎土中に1mm大の砂粒を含む。第15図24．25も弥生土器である。24は甕底部で、胎土中に粗い砂粒を含み、外面に煤が付着する。25は壷で、底部はやや台状を呈する。色調は浅黄橙色で、胎土中に2mm大の粗い砂粒を含む。26は土師器高坏で、胎土中に焼土塊が多く混じる。27～30は須恵器である。27は口径15cm前後の坏蓋で、各部の面取りははっきりとする。産地不明。28は淡灰色の坏で、底部外面は未調整に近い。南加賀産。29は奈良時代後半の有台坏で、小さい断面方形の台部をつける。高松・押水産。30も有台坏で奈良時代前半に位置付けられる。南加賀産。32は龍泉窯系の青磁で、内面見込部分に印花文が認められる。素地は淡灰色で黒色細粒が混じり、灰オリーブ色の釉を台部外面まで施す。14～15世紀のものであろう。33～35は肥前系磁器である。33は皿で白色の釉を全面にかけるが、台部付近はかかっていない箇所もある。また内面に蛇の目釉ハギが認められる。17世紀末～18世紀中頃と考えられる。34は染付碗で、体部にしのぎ状の凹凸をもつ。染付は濃紺色で、青みがかった釉を施す。また台部畳付き部分に砂目が残る。17世紀代に位置付けられる。35はクラワンカ手の碗で体部にコンニャク印判が認められる。素地はあまりよくなく、釉は乳白色に発色する。18世紀前半を中心とした時期と考えられる。36～39は土師質の管状土錘である。5～7区を中心に出土した管状土錘は破片も含めると50余点を数え、3法量に分けられる。その内、一番大きい法量のものは小片が多く図化できるものはなかった。36～38は中法量に分類でき、36は35g、37は39g、38は45gの重さを測る。39．40は、小法量に分類でき、それぞれ20g、14gの重さを測る。41は濃緑色の色調をもち、碧玉製石製品の剝片の可能性をもつ。石質はかなり悪い。42は灰色を呈した石英安山岩で、側面に敲打痕が残る。重さ435gを測る。43は板状の乳白緑色流紋岩で、一面が研ぎに使われたのか滑らかになっている。重さ173gを測る。なお、6区より小動物（ネズミか）にかじられたクルミが30点近く出土した。

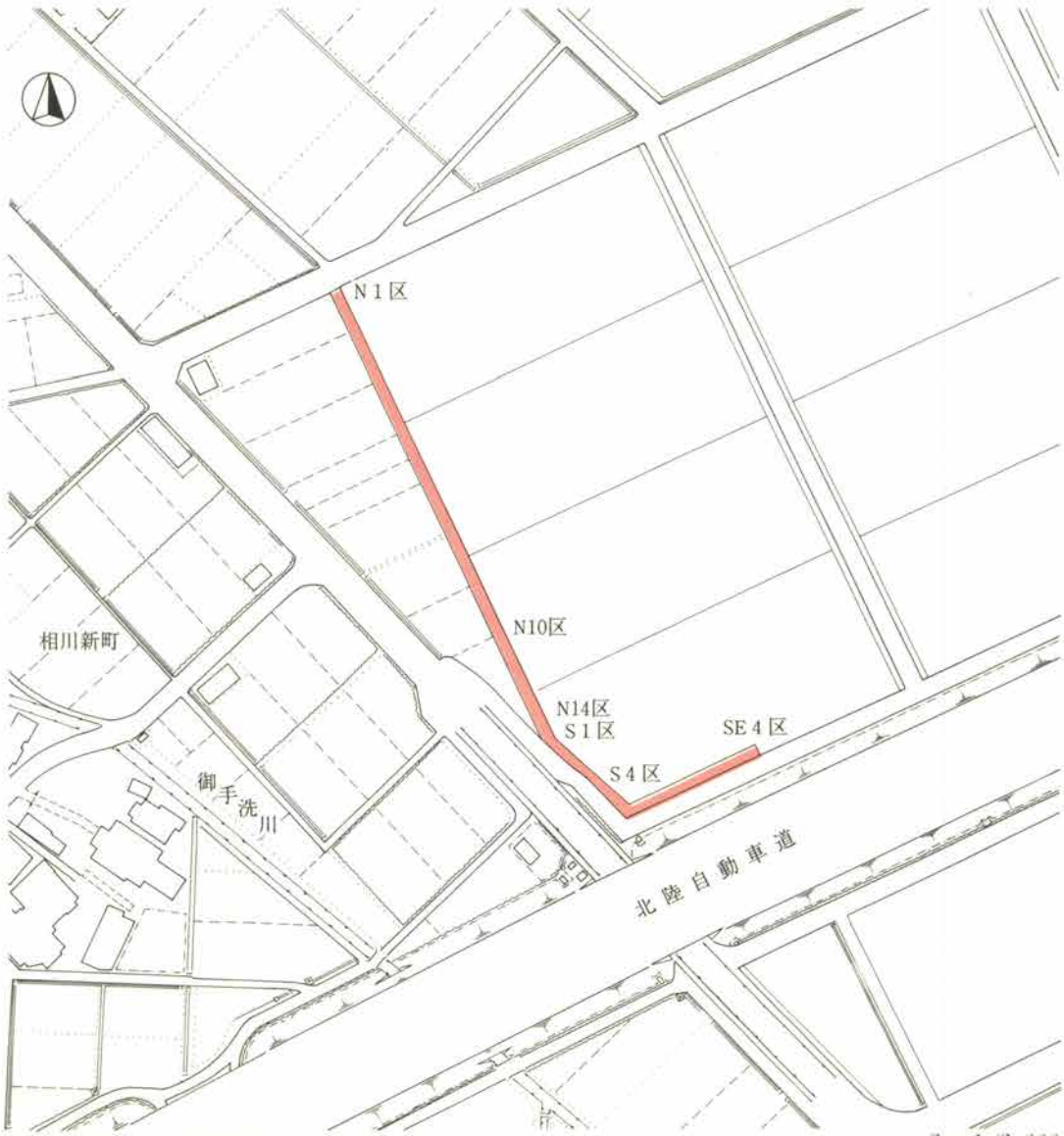
第4節　小　　結

平成元年度調査では、弥生時代中期後半から後期および古墳時代後期の遺構を検出した。昭和44年度試掘調査、平成元年度の東相川工区内での調査および平成2年度調査を考え合わせれば、弥生時代中期後半～古墳時代前期まで地点を変えながらも継続的に集落が営まれたようだ。また古墳時代中期は確認できないものの後期には、かなりしっかりとした集落が存在したと思われる。限られた範囲の調査で限界をもつものの、扇状地のつくる「島状地形」上が集落を営むのに適していたと思われる。

第４章　平成２年度の調査

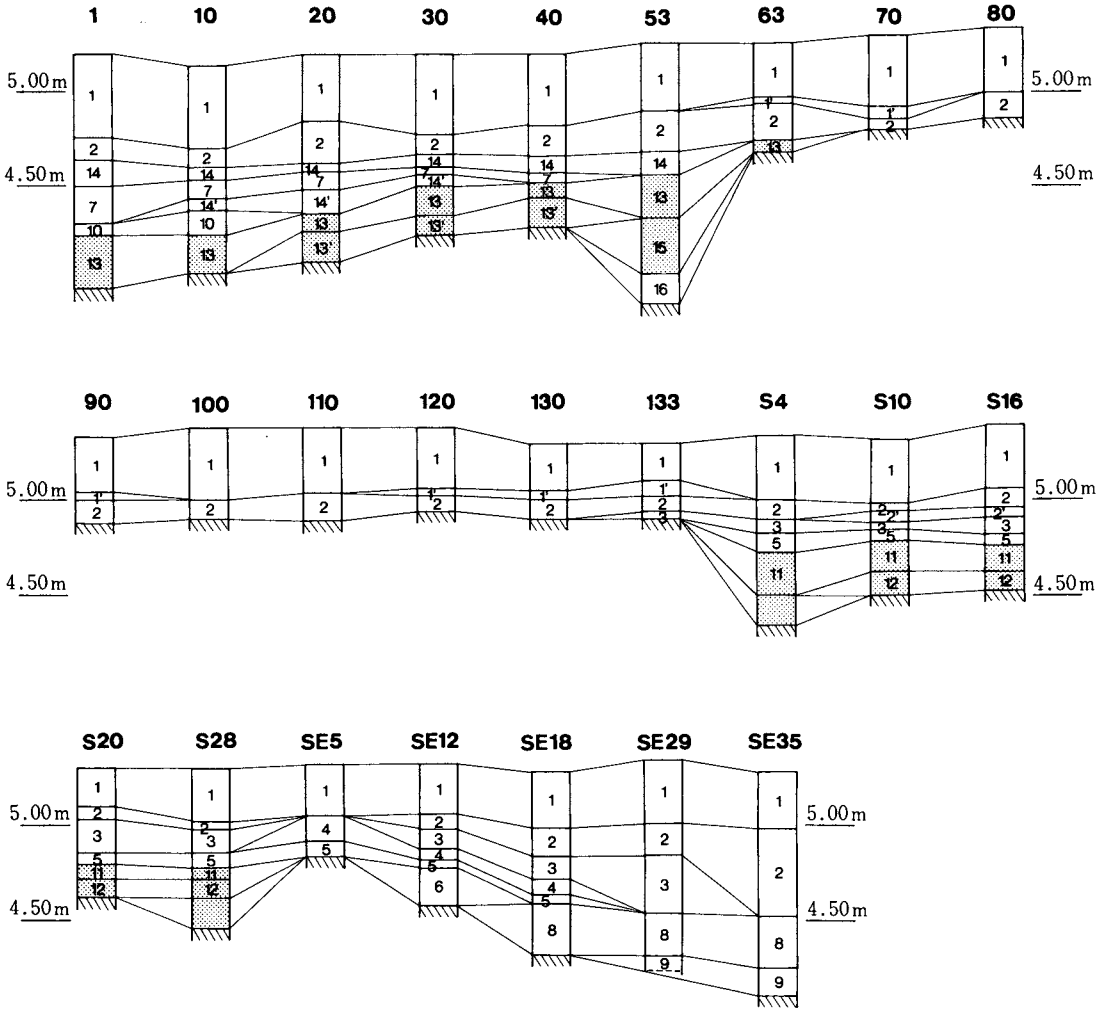
第１節　調査の概要（第16図）

平成２年（1990）に実施した本遺跡の発掘調査の原因は、平成元年度の調査と同一の県営ほ場整備事業御手洗・出城地区相川新工区にかかるものである。この相川新工区は、松任市相川新町の東方に広がり、本遺跡の分布範囲の北半部と大きく重なる。そのため工区内を南北方向に新設される２本の排水溝建設予定地に関しては、平成元年度に発掘調査を終えたが、途中工区の西側部分に面して、新規の排水溝を建設する内容に工事計画が変更された。



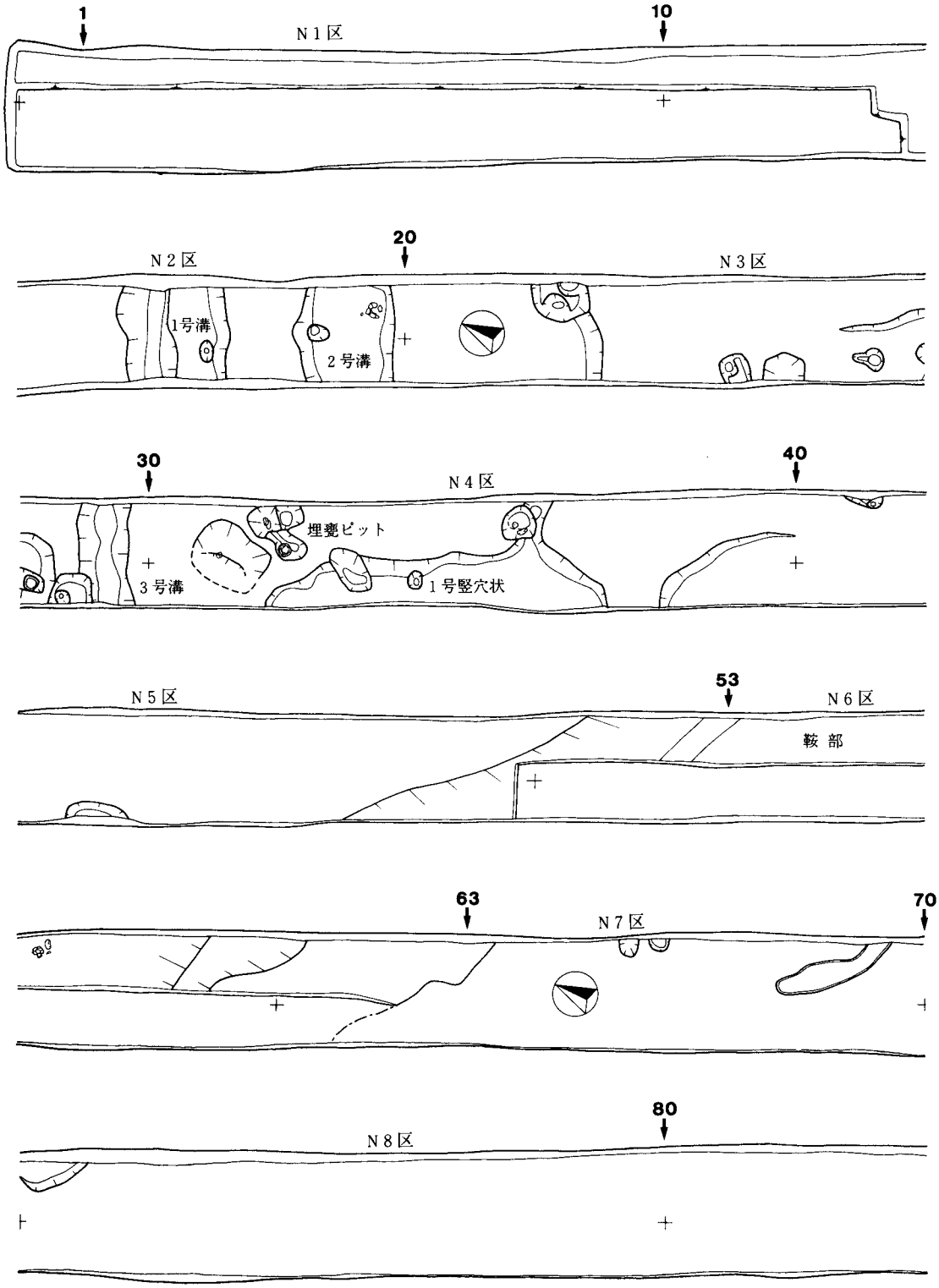
第16図　平成２年度調査区位置図

この西側の排水溝に関しては、当センターと石川県松任土地改良事務所との協議の結果、平成元年のほ場整備の工事では仮排水の溝としておき、平成２年の稲刈後に発掘調査を別途実施することで合意された。調査面積は340m²で、平成２年11月16日から11月29日にかけて実施した。



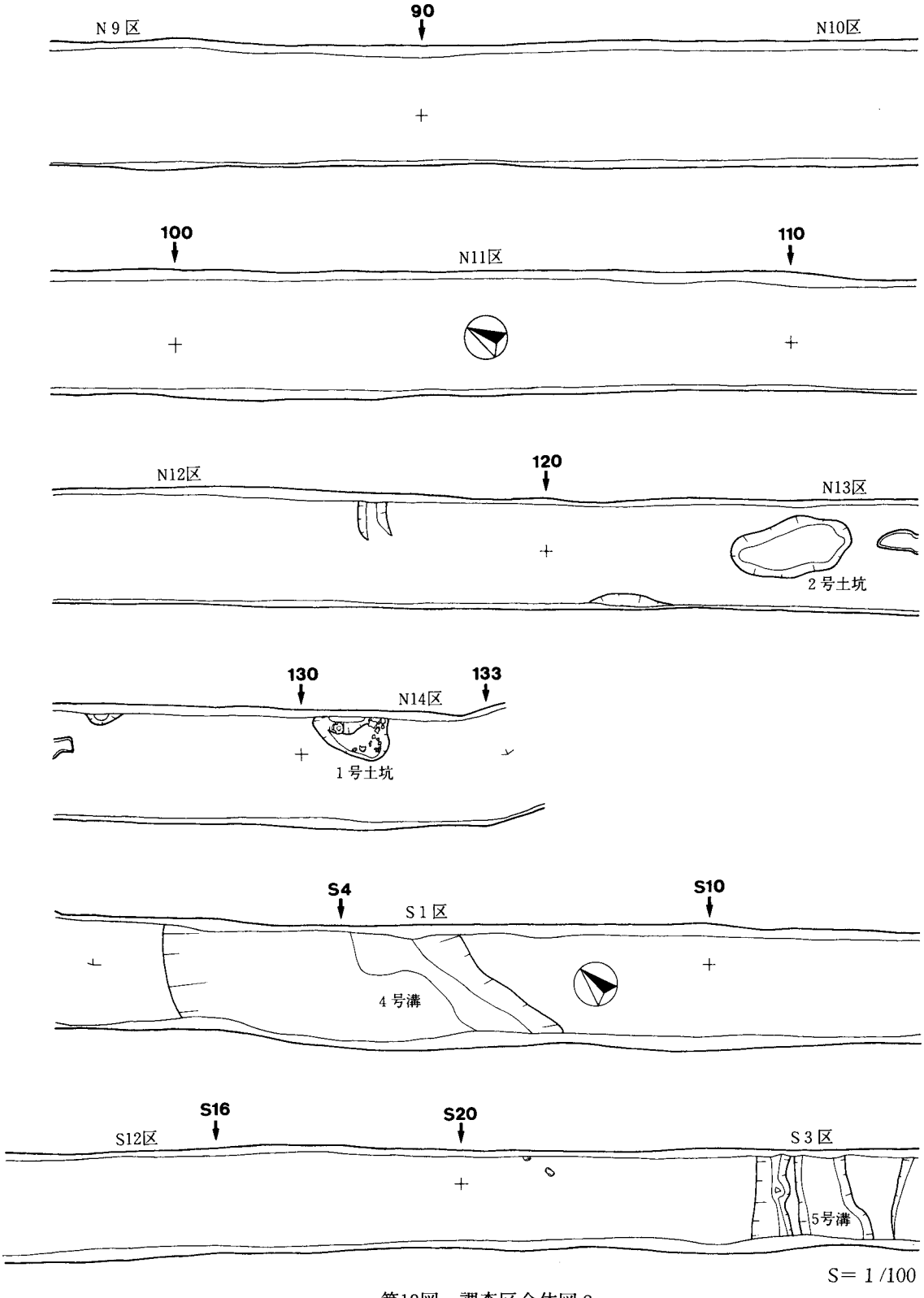
1	暗褐色砂質土	4	黒灰色シルト	9	青灰色粘土	13′	黒褐色土（包含層，地山ブロック含む）
1′	黄褐色土（床土）	5	淡灰褐色粘質土	10	淡灰褐色砂質土	14	茶褐色粘質土（床土）
2	暗青灰色砂	6	暗褐色土（酸化鉄沈着）	11	暗褐色粘質土	14′	茶褐色土（床土）
2′	淡灰褐色土	7	暗灰色シルト	12	暗褐色土（地山ブロック含む）	15	暗灰色粘土（酸化鉄）
3	暗褐色シルト	8	暗灰褐色粘質土	13	黒灰色土（包含層）	16	淡灰色粘土（酸化鉄）

第17図　調査区の土層柱状図

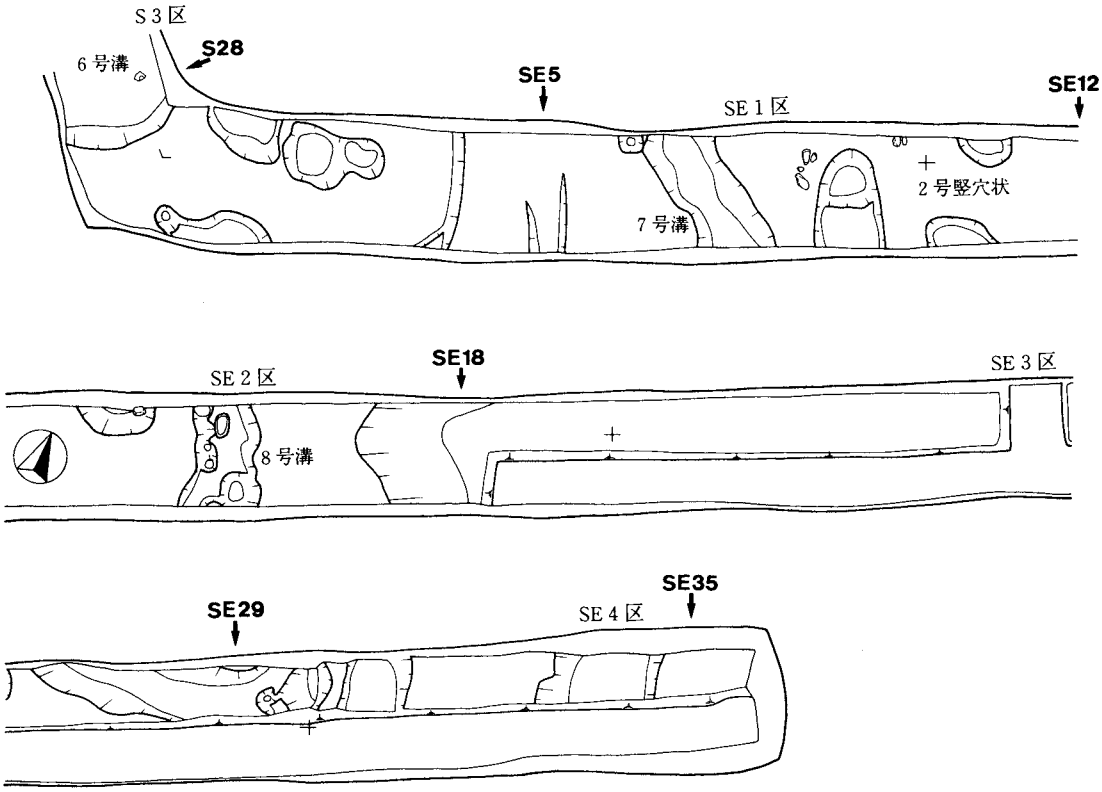


S＝ 1 /100

第18図　調査区全体図 1



第19図　調査区全体図 2



S＝1/100

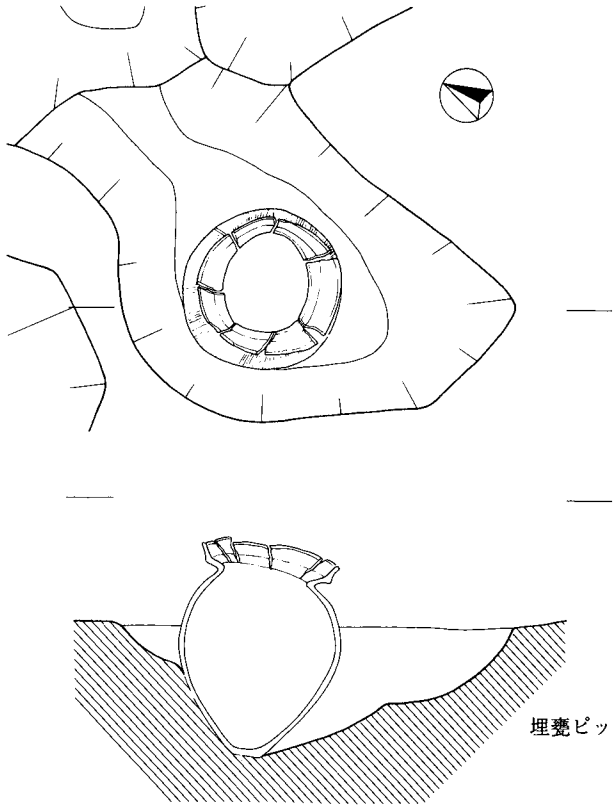
第20図　調査区全体図3

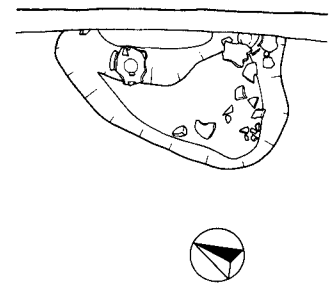
第2節　層序と遺構（第17～21図）

1　基本層序と地形

本遺跡の現況は、標高5m前後を測る平坦な水田地帯であるが、南から北へ緩やかな傾斜が見られ、かつては自噴する泉などか点在したと伝えられている。これは当地が手取川扇状地の扇端部に位置するためで、調査で確認された旧地形も、それを裏付ける内容であった。

南北方向をとる調査区のN7区からN14区の範囲は、造成土砂と判断される暗青灰層の直下から遺構が検出され、遺物包含層の形成は見られない。遺構の種別は、土坑とピットで、その上部は削平を受けている様子が窺えることから、この中央部は南北方向に細長い島状の高まりであったと見られる。また北端のN1区と南端のSE4区では、暗灰褐色粘質土から黒灰色粘質土の有機質土壌の堆積が見られることから、泉にほど近い凹地の一角と判断された。この旧地形に見られるような起伏は、手取川扇状地の発掘調査では、一般的に認められる地形で、扇状地に通有の島状地形と考えられる。





第１号土坑

S＝１/10・１/40

第21図　遺構実側図

2　検出遺構

検出された遺構の種別は、竪穴状遺構、土坑、土器埋納穴、溝、ピットで、集落遺跡と判断される内容で、調査区の両端に位置したと考えられる凹地へむかう緩傾斜面で多く検出された。またＮ４区の埋甕ピットは、弥生時代後期後半の甕（月影式）を据え置いた特異な遺構である。

Ｎ２区の第１・２号溝は、幅140～160cmを測り、第２号溝の南側平坦地と併せ、竪穴住居であった可能性が高い。Ｎ３区の第３号溝は、深さ10cm前後と浅いが、第１号竪穴状遺構に併設した溝と判断される。この竪穴状遺構の年代は、弥生時代後期後半期と考えられる。その脇に位置する埋甕ピットは、平面が不整形な楕円を呈し、深さ18cmを測るピットに、口径16.9cm、高さ27.5cmの甕を体部中程まで、埋め込んだ遺構である。性格は不明であるが、第１号竪穴状遺構に付属した遺構であろう。Ｎ６区の鞍部は自然地形とみられる。

Ｎ７～14区は、地山が淡黄橙色の砂質土で、標高4.8mを測る高まりで、その南方に土坑とピットが確認された。第１号土坑は、径120cm、深さ22cmを測る。堆積土層からすると、その上部は削平を受けているようである。Ｓ１区の第４号溝は、幅570cm、深さ50cmを測り、近世の用水跡とみられる。Ｓ３区の第５号溝からＳＥ２区の第８号溝までは、覆土が同質で、ほぼ同時期の遺構と判断された。とくに第７・８号溝は、深さ10cm溝で、底のレベルがほぼ同一であることからして、その内部は第２号竪穴状遺構と判断される。

第３節　出土遺物

１．遺構出土遺物（第22図、図版17）

Ｎ区ピット３

第22図１はＮ区ピット３中に埋甕として埋置されていた弥生土器で、口径16.9㎝、器高27.5㎝を測る中型の有段口縁の甕形土器である。口縁部の立ち上がりは比較的短く、外面に弱い擬凹線を施し、肩部に連続的な刺突を施した張りの小さい胴部をもつ。底径は4.0㎝を測る。外面には底部付近を除いて炭化物の付着が認められる。

編年上の位置付けは「法仏式」の範疇で捉えられよう。

Ｎ区土坑１

第22図２～５はＮ区土坑１覆土中から出土した土器である。

２の甕形土器は口径16.2㎝を測り、口縁部は無文の有段口縁で、下端がわずかに突出する特徴を有する。胴部は肩部付近が遺存していたにすぎないが、外面はタテハケ後ヨコハケ、内面は上端に指押さえを加え、以下横方向のヘラケズリを施す。

３の甕形土器は口径16.7㎝、器高20.0㎝を測り、口縁部は内面が頸部との境から外反するのに対し、外面は直立気味に立ち上がり端部で外反して、面取りした端部に一条の弱い凹線を施す。口縁内面にはヨコハケの痕跡を残している。胴部は球形に近い張りをもち、径2.5㎝ほどに小形化した平底の底部をもつ。

４の甕形土器は口径22.4㎝、復元器高27.5㎝を測り、口縁部の立ち上がり形状は３に近いが、端部は丸くおさめた「く」の字状口縁甕形土器である。

５は高坏形土器で、坏部下面から「ハ」の字状に大きく外反して開く脚部をもつ。４孔を有し、脚部径18.6㎝、脚部高7.0㎝を測る。脚高が低いことから小型高坏となる可能性が高い。

これらの土器のうち、２は山陰系甕の特徴を有し、３は能登型甕と称されるものにあたる。

Ｎ区土坑１出土の土器群は、出土点数が少ないものの、擬凹線文有段口縁甕形土器を含んでおらず、甕形土器の組成から見る限り、概ね「白江式」の段階に位置付けられるものと考えられる。

Ｓ３区竪穴状落ち込み遺構

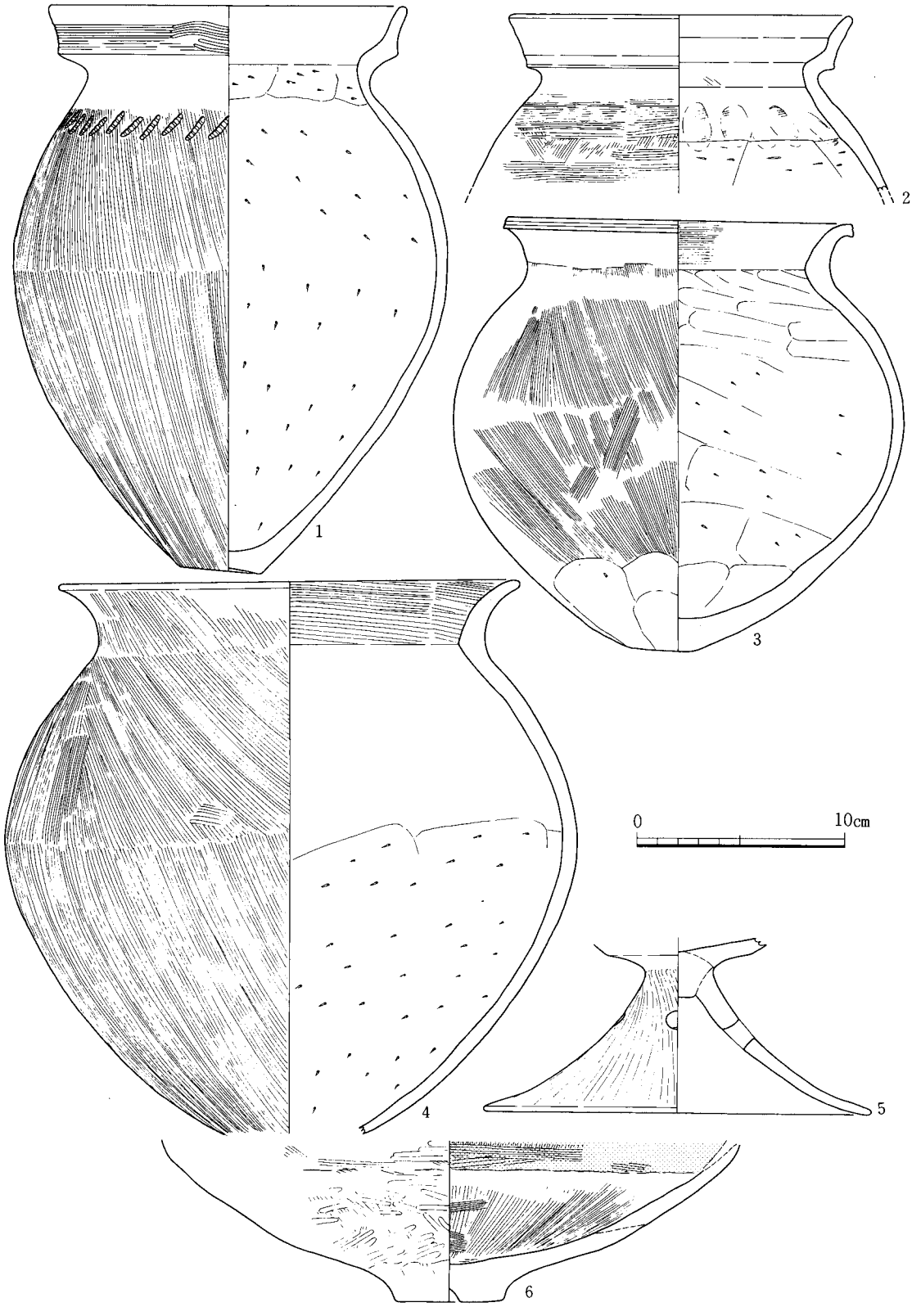
第22図６の壷形土器底部がＳ３区竪穴状落込み遺構から出土した。径5.4㎝の円盤状平底底部をもち、外面ヘラミガキ、内面タテハケで仕上げている。なお、底部から８㎝ほどのところで、粘土の接合面に沿って剥離した部分がみうけられ、剥離面にもヨコハケによる調整の痕跡が残されている。成形時に施された１次調整によるものと考えられ、壷形土器の成形にあたって底部単体で成形・調整を施した後、全体の成形がなされたことを示す痕跡として興味深い。

２．包含層出土遺物(1)（第23図～第24図、図版17～18）

包含層の出土遺物の主体は弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器群である。以下、器種ごとに説明を加える。

甕形土器Ａ類（1）

口径38.8㎝と大形の甕形土器。擬凹線文を施す有段口縁をもつ。５区出土。



第22図　遺構出土土器実測図

甕形土器B類（2、3）

口径16.4㎝、17.7㎝の中形の有段口縁甕形土器。口縁部は直立気味に立ち上がり、比較的短く厚い。外面に擬凹線文を施す。

甕形土器C類（4、5）

口径16.3㎝、14.5㎝。無文で短い口縁部を有する。

甕形土器D類（6～13）

口径17～19㎝前後、有文の中形有段口縁甕形土器。口縁部の立ち上がりが比較的長く薄手で、外面に文様を加えている。文様は擬凹線文が主体であるが、6は櫛状工具による波状文が施されている。口縁部内面には連続する圧痕を残すものが多い。包含層出土甕形土器の中では最も出土数の多い類である。

甕形土器E類（14）

口径18.8㎝、口縁部無文の有段口縁甕形土器である。口径18.8㎝。5区出土。

甕形土器F類（15）

屈曲が強く短い「く」の字状口縁に、肩の張った胴部をもつ。口縁部内外面にもハケ調整の痕跡を残す。口径16.0㎝。N2区出土。

壷形土器A類（19、20）

短頸長胴壷形土器の口頸部。19は厚手で緩く外反する口縁形態をなし、外面に円形の棒状工具による刺突文を加える。20は薄手で、直立気味に立ち上がったのち内湾気味に外反する口縁部をもつ。口縁端部はいずれも面取りが加えられている。

壷形土器B類（21～23）

有段口縁をもつ壷形土器。甕形土器D類に近い口縁部をもつ21と無文の22、23があり、23は内外面にヘラミガキを施している。なお、22は小型の甕形土器の可能性もある。

高坏形土器（27～30）

いずれも短い脚部と広がった脚裾部をもつものである。27、28は剝離した脚部上面に坏部接合時の放射状の刻目が観察される。

器台形土器A類（31）

脚部に3孔を穿つ小形の器台形土器である。

器台形土器B類（32）

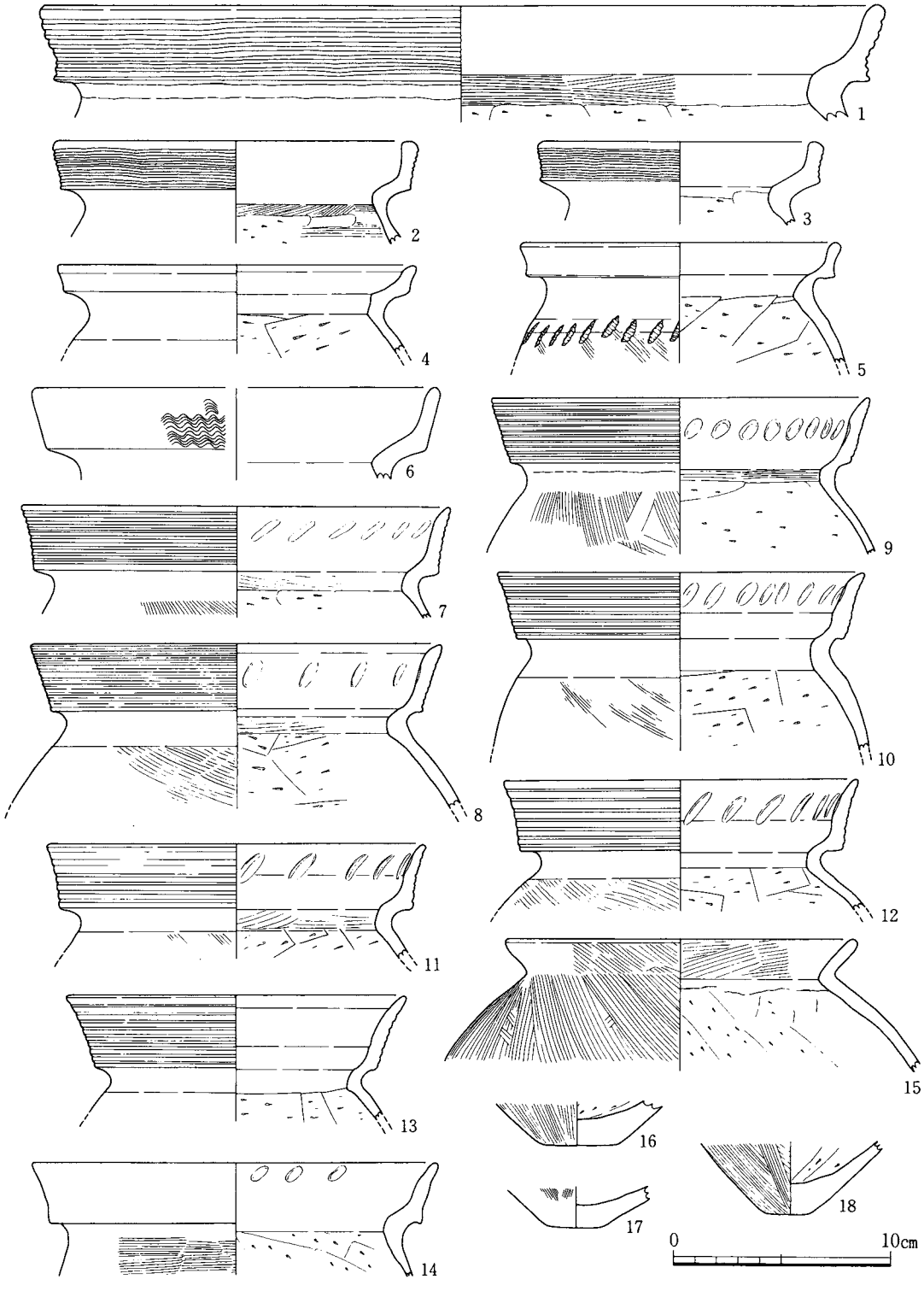
装飾器台の脚台部破片である。剝離した受部と台部の接合面に刻目を認める。N4・5区出土。

蓋形土器（33）

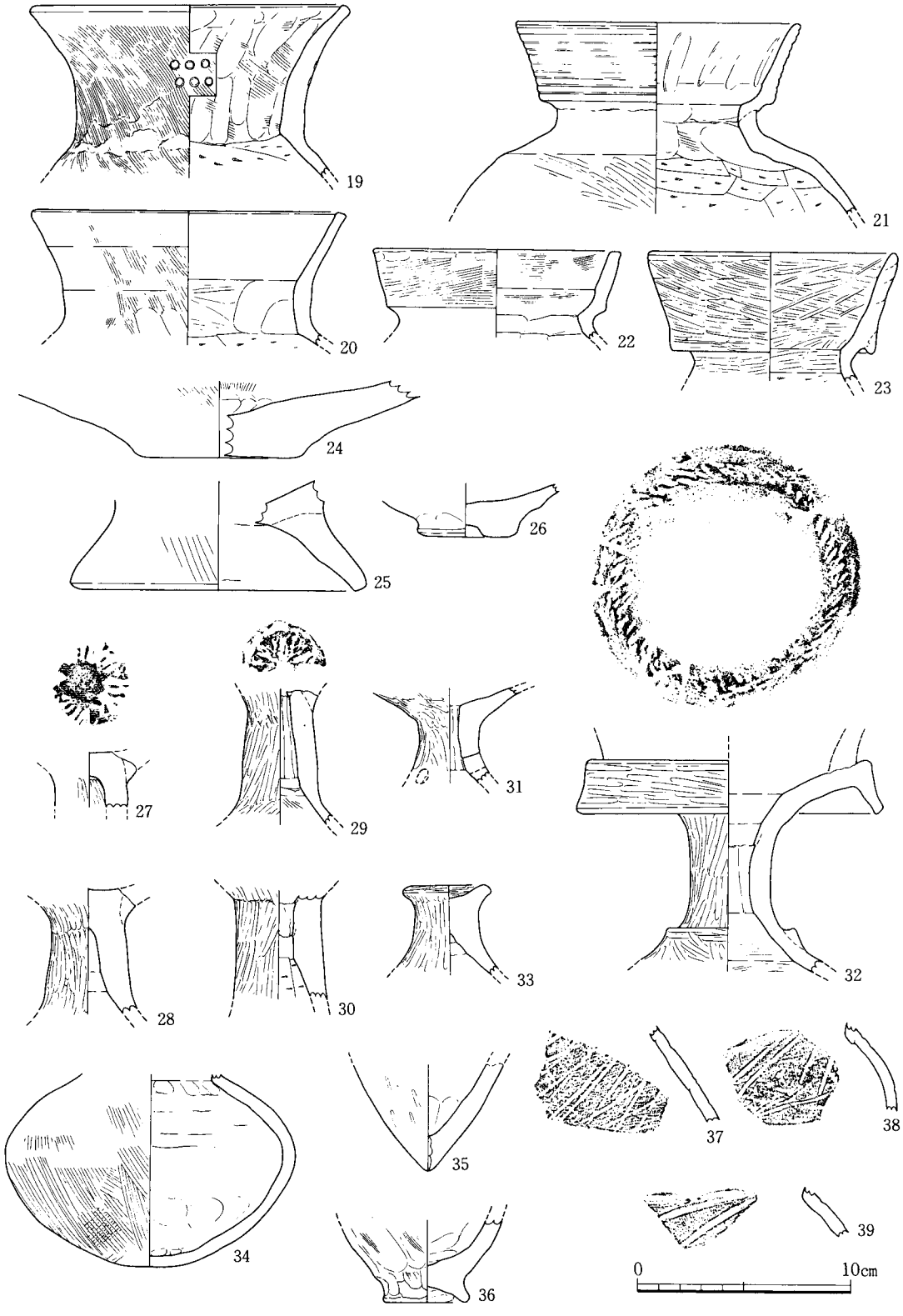
紐の中央部が凹み、先端が張り出す蓋形土器。外面にヘラミガキを施す。

その他の土器（34～36）

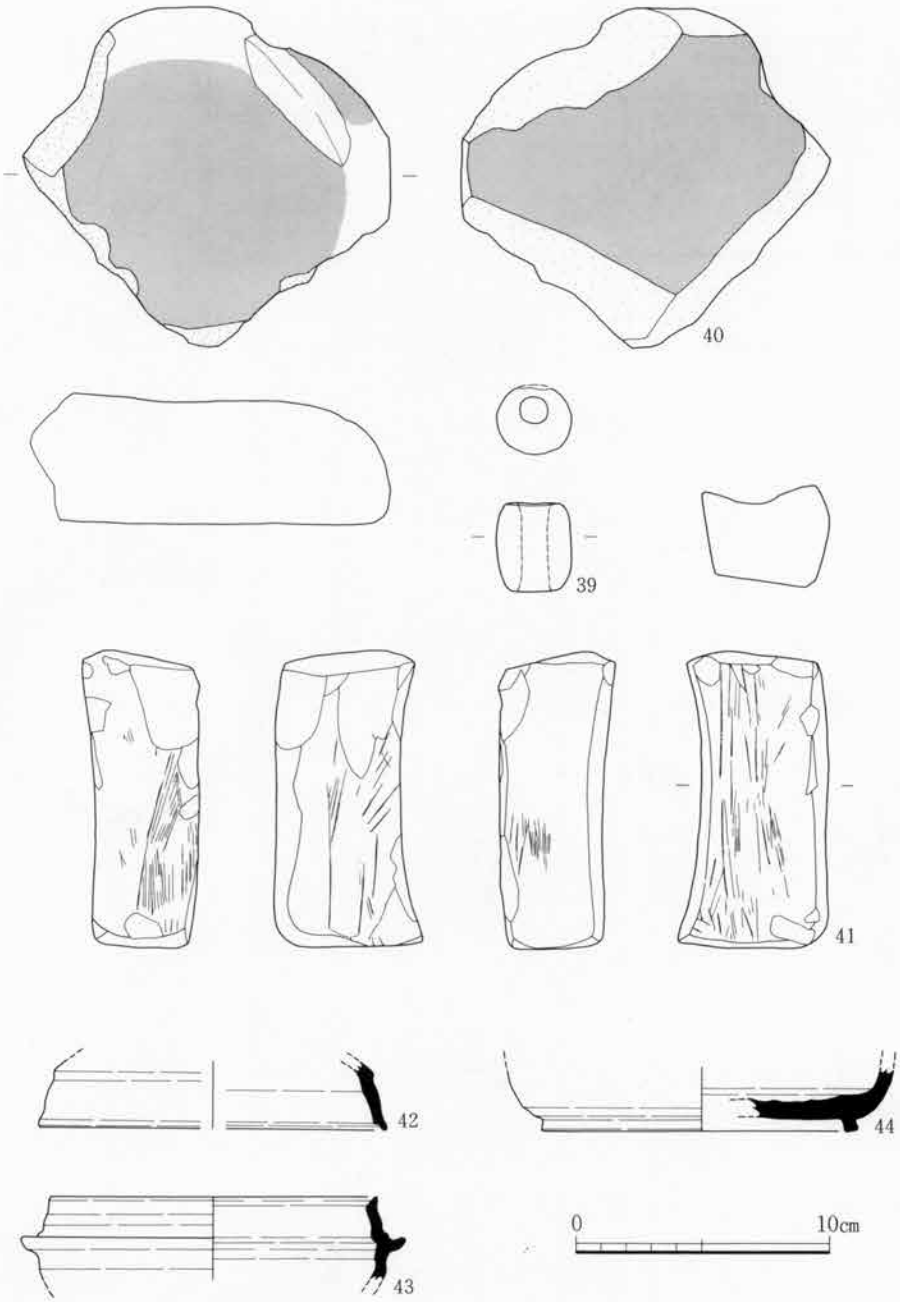
34は小型の壷形土器。胴部はつぶれた球胴形で、最大径は胴部中央よりわずかに上方に位置する。N4・5区出土。35は尖底風の鉢形土器もしくは蓋形土器。N6区出土。36も小型の鉢形土器で底部に短い脚部をもつ。S1区出土。37～39は胴部外面に複数の直線的な沈線による文様を施したもので、38、39は小型の壷ないし鉢形土器になるものと思われる。N2、N3、N5・6区出土。



第23図　包含層出土土器実測図(1)



第24図　包含層出土土器実測図(2)



第25図　包含層出土土製品石製品及び表採土器

3．包含層出土遺物(2)（第25図、図版18）

39はＳＥ３区包含層上面出土の土錘。40は砂岩質石材による石皿状の石器片。表裏両面に使用による平滑な面を留める。Ｎ３区出土。41は緑色凝灰岩質石材による砥石。各長側面に使用による擦痕を残す。42～44は表面採集した須恵器片であるが、参考のため提示した。

第5章　まとめにかえて

(1)　はじめに

相川新遺跡は平成元年・2年度の調査の結果、標高5m前後を測る扇端部の一つの微高地上に地点を変えながら立地する弥生時代中期後半～古墳時代前期および古墳時代後期の集落遺跡であることが判明した。弥生時代中期後半の集落は平成元年度調査東トレンチ周辺に、弥生時代後期の集落は平成元年度調査西トレンチ以北から平成2年度調査地区周辺に、古墳時代前期の集落は平成元年度調査Nトレンチ周辺にそれぞれ確認されている。その後しばらくの間、集落は確認できず、古墳時代後期に平成元年度調査東トレンチおよびNトレンチ周辺（現在の北陸自動車道周辺）に、ほぼ同一地点で継続して再び営まれる。飛鳥時代以降は集落が他の地点に移動し、耕地もしくは原野に化したと考えられる。このような状況から、本遺跡の立地する微高地は古墳時代までは集落を営むのに適した環境であり、このことは周辺が地下水の季節的自噴地帯であることと関連をもつと考えられる。

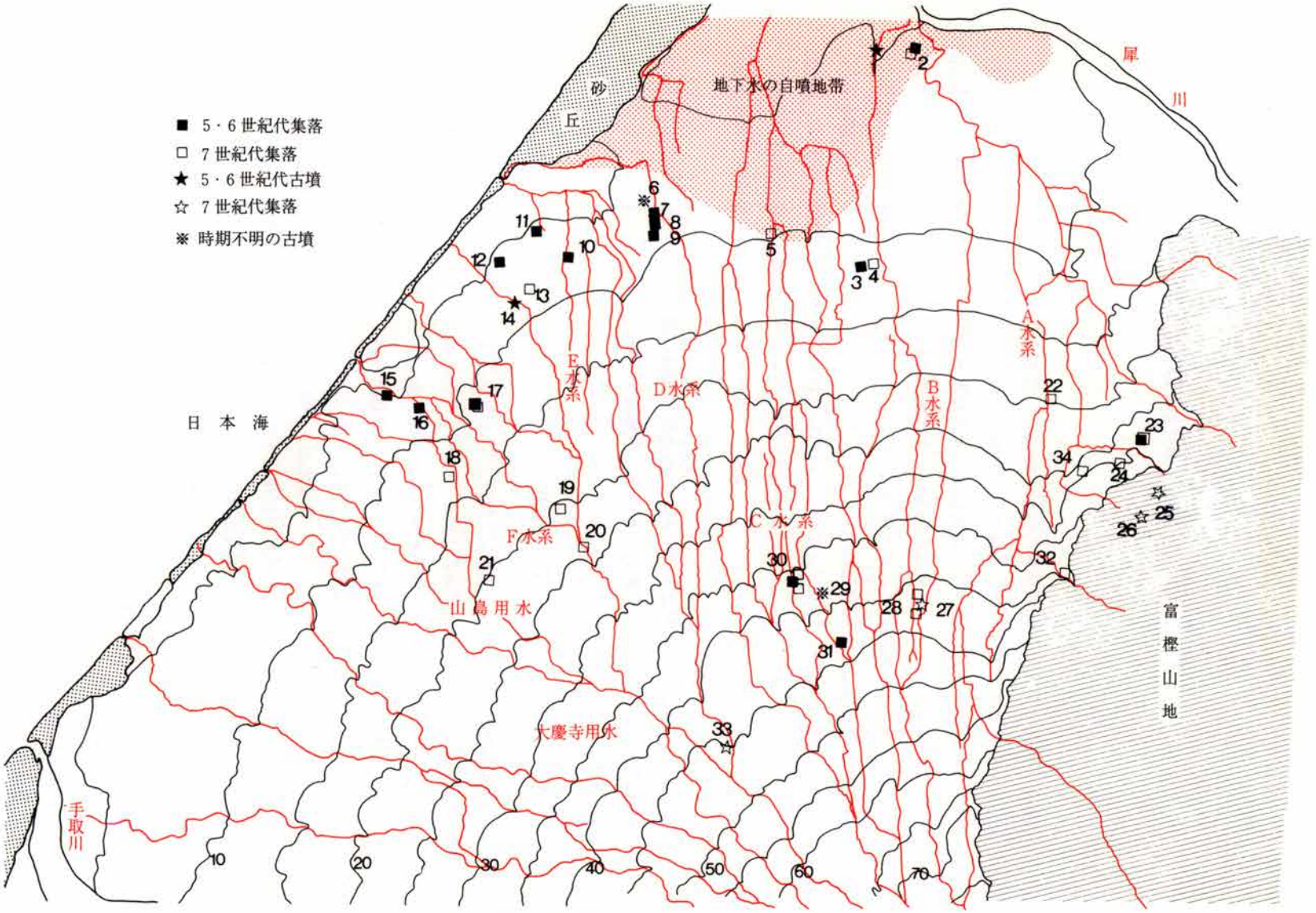
ここではいずれの調査も小規模なものであり、本遺跡の様相に関して述べられる部分が少ないため、古墳時代後期の松任平野の遺跡の分布の中で本遺跡を位置付けることでまとめとしたい。

(2)　松任平野の遺跡の分布

現在までに発掘調査・分布調査を含めて判明している須恵器出現期以降の古墳時代の遺跡の分布と明治42年作成の帝国陸軍地図記載の主な水系を示したのが第26図である。この主な水系は明治時代の七カ用水を基幹とする用水網が整備された後の状況であり、かつての手取川とその支流の痕跡を示すと考えられている。ここでは主な水系を第26図のとおり、便宜上A～F水系に分類・呼称することとしたい。A水系は富樫山地から流下し犀川に合流する水系である。B～D・F水系は現手取川から取水する水系で、B・C水系は北流して犀川に、D・F水系は日本海にそれぞれ注ぐ。現在の用水水系でいえば、B水系は富樫用水とその支流、C水系は郷用水とその支流、D水系は中村用水とその支流、F水系は山島用水の支流にあたる。またE水系は、標高15m前後の地点で自噴した地下水を源流とし、倉部川に合流する流れである。以下、遺跡の動向を水系に留意しながら述べていく[(1)]。

5～7世紀代の遺跡は、現在の鶴来町～松任市徳光町を結ぶラインより北側に存在する。

まず5世紀代の集落は、北陸自動車道に沿うように標高5m前後の低湿地地帯に4ブロック確認できる。B水系に面した古府クルビ遺跡、北塚古墳群遺跡は、手取扇状地上というよりも犀川水系の地下水の周年自噴地帯に立地する。現在10基確認されている北塚古墳群は、5世紀後半以降6世紀前半まで継続して造られ、犀川水系周辺の首長墓と考えられている。D水系に面した遺跡としては「旭遺跡群」と総称される宮永遺跡、旭小学校遺跡、一塚オオミナクチ遺跡が存在す



第26図　古墳時代の遺跡の分布（S＝1/80,000）

1	北塚古墳群(10基)	10	竹松D遺跡	19	中村ゴウデン遺跡	28	上林遺跡群
2	古府クルビ遺跡	11	浜竹松C遺跡	20	村井北遺跡	29	末松古墳
3	御経塚遺跡	12	相川新遺跡	21	米永古屋敷遺跡	30	末松遺跡群
4	御経塚ツカダ遺跡	13	東相川遺跡	22	扇が丘ゴショ遺跡	31	木津遺跡
5	横江荘遺跡・横江A遺跡	14	中相川古墳群(3基以上)	23	窪遺跡	32	額谷ドウシンダ遺跡
6	一塚古墳	15	徳光ヨキノヤマ遺跡	24	高尾新マトバ遺跡	33	田地古墳
7	一塚オオミナクチ遺跡	16	徳光フルヤシキ遺跡	25	高尾じょうざぶろう横穴遺跡	34	高尾公園遺跡
8	旭小学校遺跡	17	北安田北遺跡	26	狐青横穴(5基以上)		
9	宮永遺跡	18	法仏遺跡	27	上林古墳		

る。これらの遺跡は島状に細長くのびる一つの微高地上に立地、6世紀代をも通した中核的な遺跡群と考えられる。また、詳細不明ではあるものの、近接して一塚古墳の存在が知られており、同遺跡群との関係が指摘されている。F水系は相川町周辺（相川新遺跡、中相川古墳群）と徳光町周辺（徳光古屋敷遺跡[2]等）の2ブロックが確認されている。前者の2遺跡は時期的・地理的にも近接し、密接な関係をもつと考えられる。

6世紀代は、扇端部では引き続き4ブロックの集落が存続する一方、新たに扇央部にも集落の展開が確認され、扇状地開発の一つの画期をなす。まず扇端部ではB水系に面する北塚古墳群は6世紀前半代のうちに造墓活動を停止すると考えられる。D水系では同じ微高地上に位置を移して引き続き集落が営まれる。E水系では浜相川C遺跡、竹松D遺跡等で少量の遺物が出土することから、集落が存在していたようだ。F水系では相川町周辺のブロックは集落（相川新遺跡）が継続し、古墳も築かれる。また徳光町（北安田北遺跡）周辺でも、地点を変えながら引き続き集落が営まれるようだ。次に扇央部だが、現在市街地化が進んでおり、断片的にしか判明していないものの、新たに三つの地域で集落の展開をみることは確実である。B水系の木津遺跡[3]では6世紀初頭の遺物が出土しており、近接する末松周辺にも遺物の出土をみるようだ[4]。またA水系の窪遺跡（標高25～30m）やB水系の御経塚遺跡（標高10m強）でも遺物が出土し、その実態は不明なものの6世紀後半代には確実に集落が展開したと考えられる。

7世紀初頭になると、集落分布に大きな変化がみられ、松任平野の集落の在り方に関する大きな画期ととらえられる。まず扇端部ではB水系の自噴地帯に立地する古府クルビ遺跡を除き、7世紀初頭までにほとんどの集落遺跡が廃絶、標高10～15mを測る扇端部寄りの扇央部に移動する。D水系では現在集落遺跡は確認されていない。C水系では横江周辺の低湿地帯で、新たに集落（横江A遺跡）が営まれる一方、後述するような新たな動きが活発化する。E水系では5世紀以降継続して営まれた中核的集落である相川新遺跡が7世紀初頭には廃絶し、近接して東相川遺跡等が成立する。この東相川遺跡は小規模な調査がおこなわれており[5]、7世紀前半代の計画性をもって配置された掘建柱建物のみで構成される集落であることが判明している。当期の「一般的な」集落が竪穴住居を主体に構成されることを考慮すれば、上位階層に属する集団の居住域と想定できる。F水系でも以降の拠点的集落となる法仏遺跡や北安田北遺跡が7世紀前半に、また扇央部寄り（標高20m前後）で村井北遺跡が7世紀後半代に確認され、次第に扇央部にむけての開発が進んでいった状況がみてとれる。なお扇端部では古墳の造営は終焉を迎えるようで、現在1基も確認されていない。

次に、扇央部では6世紀代に成立した三つの地域の集落を中核として、周辺部で集落が増加する傾向を示し、扇端部の在り方とは好対照をなす。A水系では現在4遺跡が確認され、7世紀前半代には扇ケ丘ゴショ遺跡、高尾新マトバ遺跡、7世紀末には高尾公園遺跡、高尾ドウシンダ遺跡が近接して成立し、その展開する時期において扇端部とは微妙に異なる画期をもつ印象を受ける。また、これらの集落に面する丘陵部で横穴古墳群が確認され、集落遺跡群の動向と有機的関連を指摘できる。B水系では6世紀代から引き続いて野々市町御経塚周辺に加え、野々市町上林周辺の島状の微高地上に新たに集落群が成立する。この集落群に含まれる上林新庄遺跡では7世紀前半代に位置付けられる上林古墳が検出され、古墳を造営できるだけの勢力が存在したと想定できる。立地からみてC水系の末松周辺の集落と関連をもつと考えられる。C水系では特に活発な集落の展開が確認できる。末松ダイカン遺跡等の集落遺跡に加え、7世紀初頭には田地古墳が造られ、7世紀中頃には北加賀地域で唯一の末松廃寺[6]が建立される。以上のことから扇央部の集落の動向は古墳の造営も含めて、扇端部に対して確実に優位性をもつと想定され、丘陵部に横穴古墳を造るA水系の集団と平野部に古墳も造るB・C水系の集団に大別可能と考えられる。また、扇央部の中では後者の集団が優位と位置付けられるようだ。なお、8世紀以降の扇央部の集落はこの3地域の集落群を核に標高の低い地域で増加傾向を示す。

(3) 最後に

松任平野は典型的な扇状地形（手取扇状地）の一角を構成し、松任平野の開発については既に浅香年木氏が論を展開されている[7]。氏は遺跡の分布状況から、弥生時代以降古墳時代前期までは扇端部の海岸線に近い「過低湿地地帯における自然潅漑に依拠した原始農耕段階」にあり、扇央部の開発は「極めて点在的な分布」を示すとされる。そして扇状地開発の前提となる「池・溝の建設による人工潅漑形態」を組織しうる強力な政治勢力は充分な成長をみず、そのことは地域と比較して古墳の様相が「量・質」ともに貧弱であることに如実に反映されていると指摘している。そして、遅くとも古墳時代前期中葉以降には扇央部の末松遺跡周辺の小地域を拠点に「断続的に農耕集落の形成が繰り返され、後期には、これを踏まえた小規模な族長層の支配圏が形成されはじめていたことは、ほぼ確実」とする。このような6世紀代までの「極めて停滞的であった扇状地の開発」は、7世紀後半代以降に大きな転期を迎えて、かなり進展をみせ、その背景には「潅漑技術を含む勧農機能の、国家権力による集中的な把握体制の確立」による古代的開発があると考えた。

一方、考古学の成果からみると、扇央部の調査が進んでいない現状を加味しても、5世紀代に扇央部で大規模・定住的な集落の存在を想定する積極的根拠に乏しく、扇端部や臨海部の低湿地帯の微高地にのみ集落遺跡が点在、小規模な古墳群を造営していたと考えられる。また犀川水系、森本川水系や同じ扇状地上の能美地域の古墳群と対して、その相対的地位の低さは否定しきれず、浅香年木氏の指摘と一致した状況を示す。6世紀代になっても、扇端部が集落分布の主体であることは動かないものの、扇央部でも7世紀代以降の核となるような集落遺跡が3地域で成立、扇

状地開発の画期と位置付けられる。7世紀代は、より大きな画期と位置付けられ、扇端部では従来の集落が一斉に廃絶、標高10m前後の扇央部に近い地域に移動する。それに対して扇央部では6世紀代の集落に加え、周辺部で新たな集落が増加する傾向を示す。また、扇端部では古墳の造営が確認できないのに対して、扇央部では7世紀初頭以降に古墳が知られるようになる。このような状況から、7世紀になると扇端部の集団（F水系の集団）に対して、扇央部の集団（A水系、B・C水系の集団）が優位性を示すという大きな変化が認められ、それは7世紀中頃に建立される末松廃寺の存在からもうかがい知ることができる。そして扇央部の開発が少なくとも扇央部の集団（A水系の集団およびB・C水系の集団）と扇端部の集団（F水系の集団）により、少なくとも四つ以上の地域から標高20～40mの地域を目指して進み、中でもF水系の集団の扇央部に向けての開発が顕著であるといえよう。

以上のことから、扇央部の開発に関して、時期差をもつ画期が指摘できる。扇央部では6世紀代の内に異なる三つの集団が成立、7世紀代に古墳・寺院の成立を可能とするような著しい成長を遂げるのと考えられるに対して、扇端部では5・6世紀代の開発はどちらかといえば停滞的で扇央部への開発は7世紀以降に画期をもつと考えられる。最後に、古代の扇状地の開発に関して、浅香氏の指摘されるような7世紀以降の単純な扇端部からの開発のみでなく、6世紀以降の扇央部からの活発な開発も想定できることを強調しておきたい。

註

(1) ここで水系単位に整理して述べる主な理由として、①扇状地では農耕を営むのに必要な水をほとんど地上水（河川）に依存せざるをえず、扇状地の開発イコール潅漑用水の整備という側面が極めて強いこと、②扇央部の遺跡の分布からみて各水系ごとに集落遺跡群が展開すると考えられること、③藩政期の郷が水系ごとに用水の維持・管理を媒介にして強く結び付いていること等がある。水系を単位とした集落遺跡の在り方については稿を改めて述べたい。

(2) 湯尻修平氏よりご教示いただいた。(昭和61年度に県営ほ場整備事業に係わり発掘調査を実施)

(3) 西野秀和氏よりご教示いただいた。

(4) 湯尻修平氏よりご教示いただいた。

(5) 北野博司他『石川県松任市相川遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター　1992

(6) 末松廃寺の建立に関しては、その瓦の供給が能美丘陵の湯屋窯跡群であることが判明し、より広いエリアを含んだ成立事情を考慮する必要を指摘されている。しかしここでは、江沼地域では同時期に活発に寺院が建立されていることから、数郷程度（扇央部の山沿いの集団程度）でも成立が可能であるとの考えにたって述べることにしたい。

(7) 浅香年木　「後論　平安期における手取扇状地の開発と領主」『加賀三浦遺跡の研究』松任市教育委員会、石川考古学研究会　1977

引用・参考文献

橋本澄夫他『金沢市古府クルビ遺跡（第1・2次)』石川県教育委員会　1972
高　一男　『松任市徳光ヨキノヤマ遺跡』石川県教育委員会　1976
高堀勝喜他『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会　1983
吉田　敦　『御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）発掘調査報告書Ⅰ』野々市町教育委員会　1984
吉岡康暢他『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会、石川考古学研究会　1983

木田　清　『松任市横江Ａ遺跡』松任市教育委員会・株式会社明石合銅　1987
木田　清　『松任市一塚オオミナクチ遺跡』松任市教育委員会　1987
木田　清　『松任市相木源波遺跡』松任市教育委員会　1990
木田　清　『松任市旭小学校遺跡』松任市教育委員会　1990
前田清彦　『旭遺跡群発掘調査概報』松任市教育委員会　1990
前田清彦　『松任市北安田北遺跡Ⅱ』松任市教育委員会　1990
前田清彦　『松任市北安田北遺跡Ⅳ』松任市教育委員会　1992
西野秀和・中屋克彦『松任市法仏遺跡第５・６次発掘調査報告』石川県立埋蔵文化財センター　1991
戸潤幹夫他『松任市宮永遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1984
三浦澄夫・戸潤幹夫他『北塚遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター　1985
北野博司　『末松遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1989
米沢義光他『松任市一塚イチノツカ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1990
湯尻修平他『宮丸遺跡・村井北遺跡・北出遺跡・村井キヒダ遺跡・米永古屋敷遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1991
安　英樹他『松任市竹松遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター　1992
北野博司他『石川県松任市相川遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター　1992
石川考古学研究会「北加賀地域古墳群分布調査報告」『石川考古学研究会々誌』第22号　石川考古学研究会　1979

図版1　平成元年度調査その1

(1)　西トレンチ表土除去作業風景

(2)　東トレンチ作業風景

図版2　平成元年度調査その2

(1)　東トレンチ完掘状況（北から）

(2)　東トレンチ11、12区完掘状況（北から）

(1)　東トレンチ13～17区完掘状況（南から）

(2)　東トレンチ５、６区 鞍部（北西から）

図版4　平成元年度調査その4

(1)　東トレンチ5、6区
鞍部（南から）

(2)　東トレンチ7区
1号土坑（北から）

(3)　東トレンチ2、3区
風倒木痕（北から）

(1)　西トレンチ1、2区完掘状況（北から）

(2)　西トレンチ完掘状況（50m付近より北を望む）

図版6　平成元年度調査その6

(1)　西トレンチ完掘状況（130m付近より南を望む）

(2)　西トレンチ５～８区完掘状況（北から）

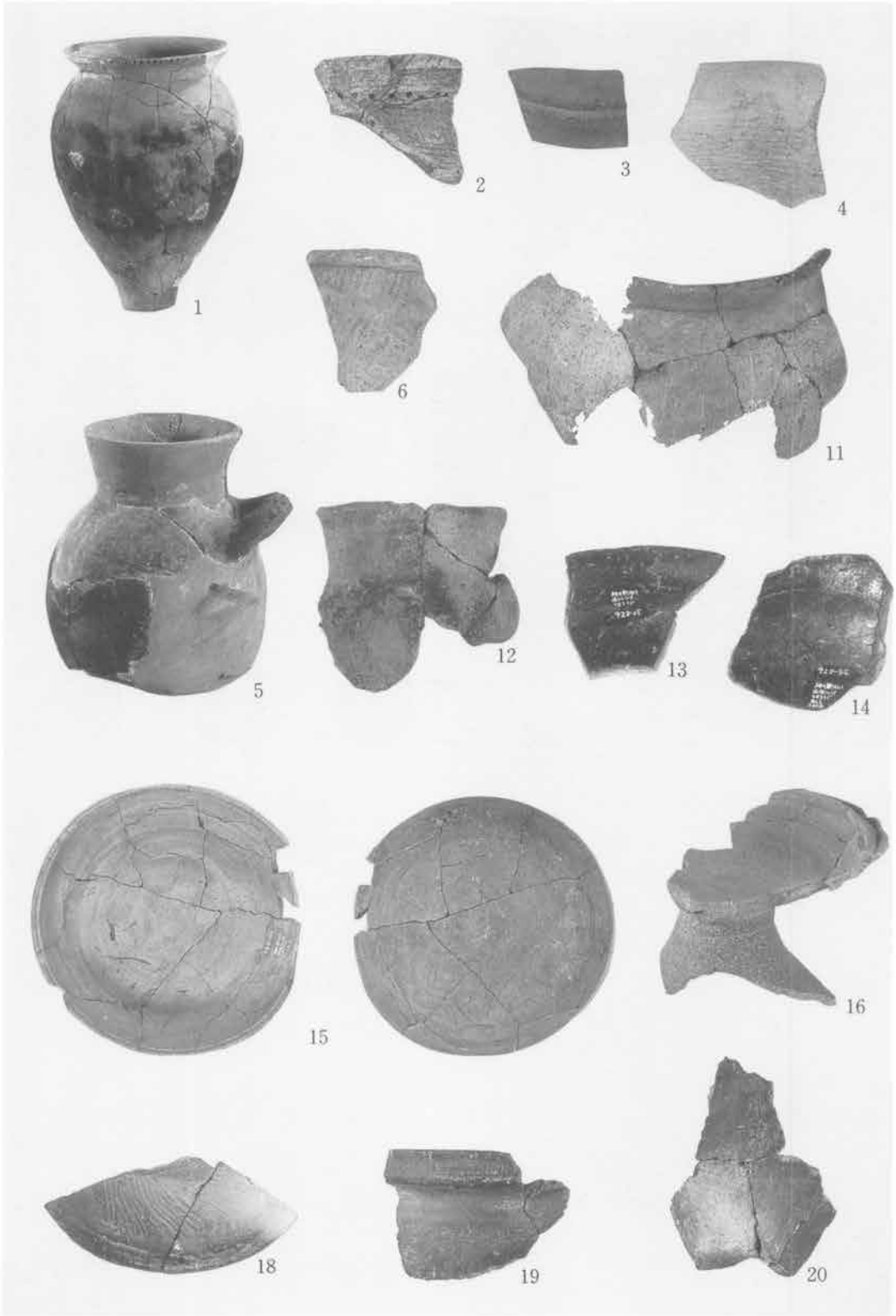
(1)　西トレンチ7、8区1、2号竪穴住居（北から）

(2)　西トレンチ6、7区1、2号溝（南から）

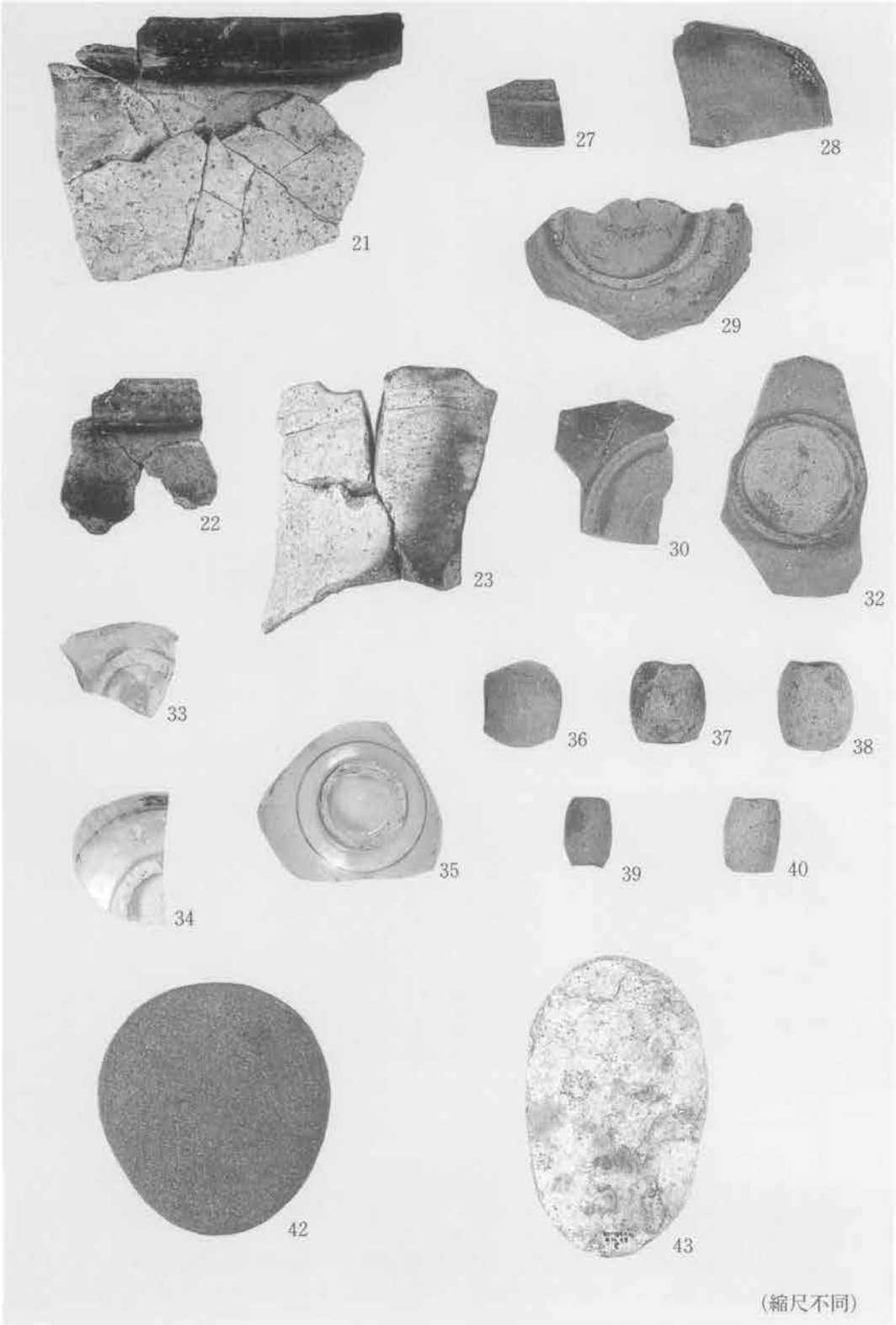
図版8　平成元年度調査その8

(1)　西トレンチ7区1号土坑（北東から）

(2)　西トレンチ7区完掘状況（北西から）



(1)　出土遺物



(2)　出土遺物

図版11　平成2年度調査その1

(1)　N区調査風景

(2)　N区全景（北から）

図版12　平成2年度調査その2

(1)　N区全景（南から）

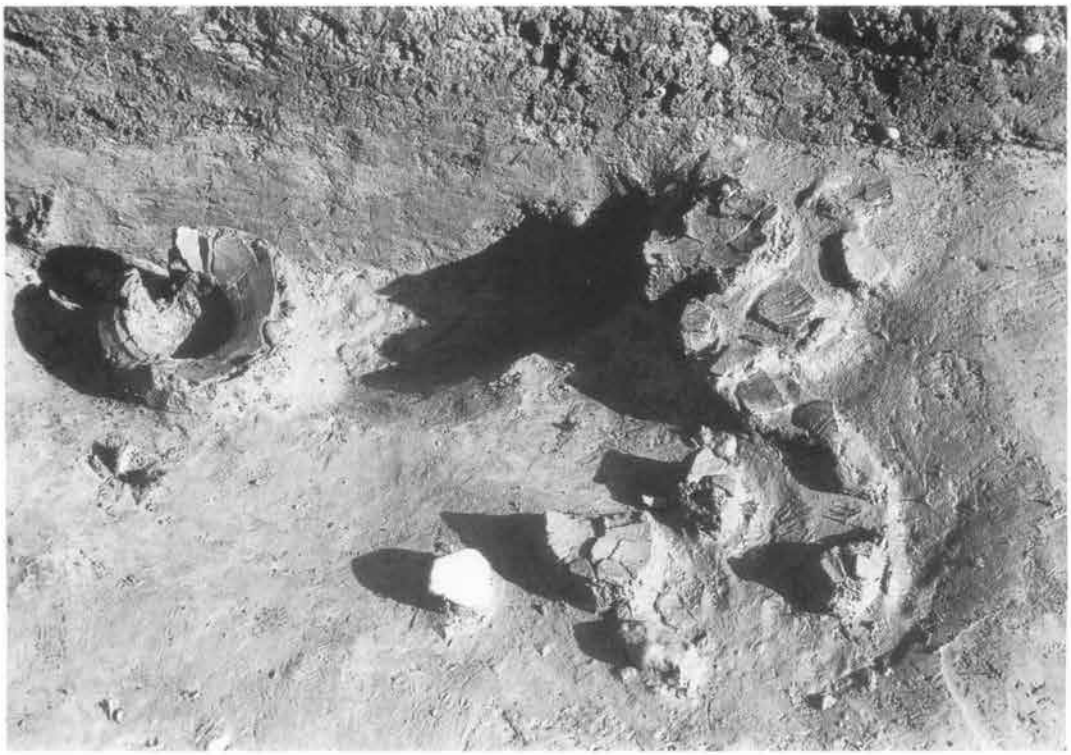
(2)　N区完掘状況（埋甕周辺）

(1)　埋甕検出状況

(2)　埋甕完掘状況

図版14　平成2年度調査その4

(1)　N区南端～S区完掘状況（北から）



(2)　N区南端部土坑1土器出土状況

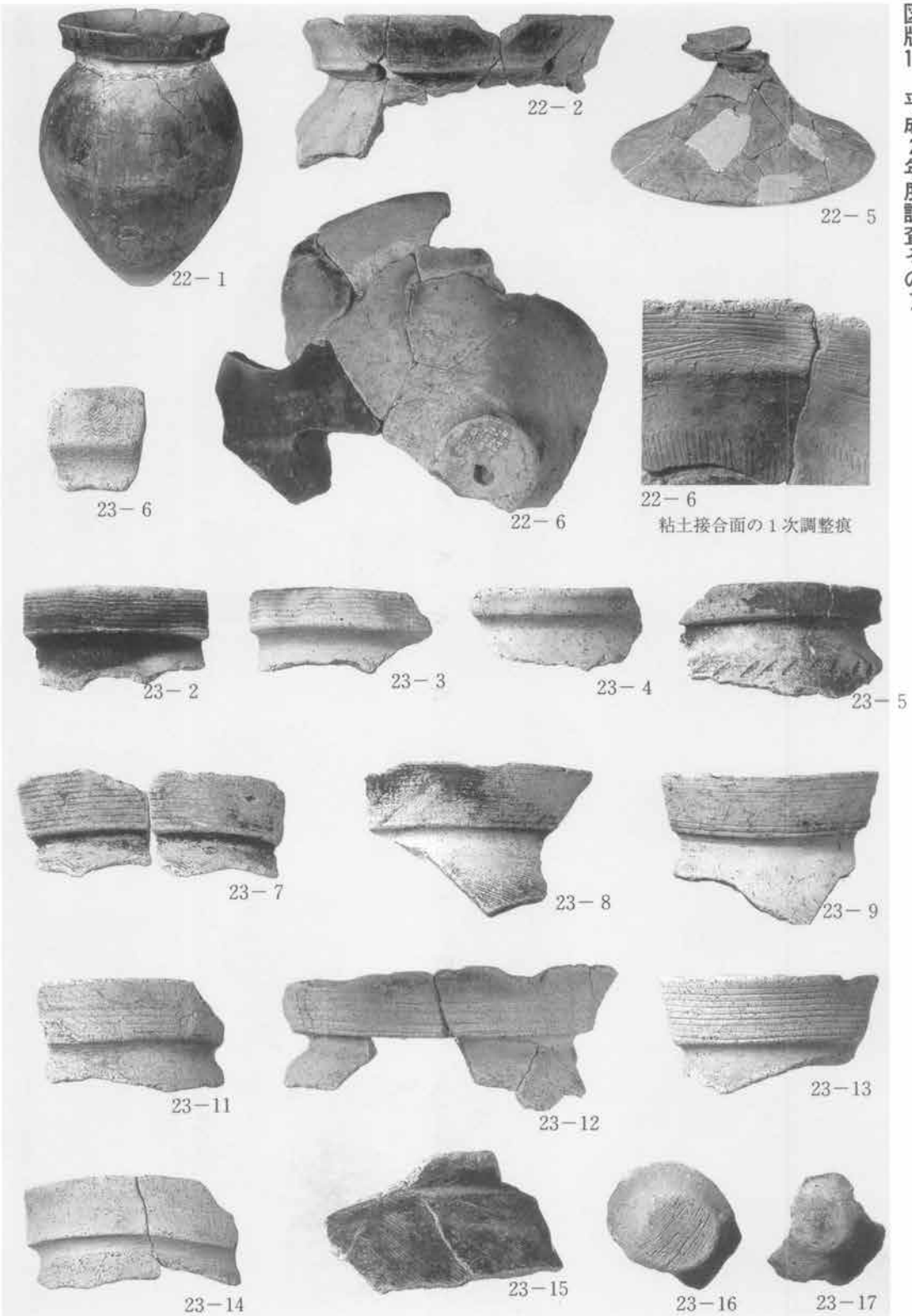
(1)　S区全景（南から）

(2)　SE区全景

図版16　平成2年度調査その6

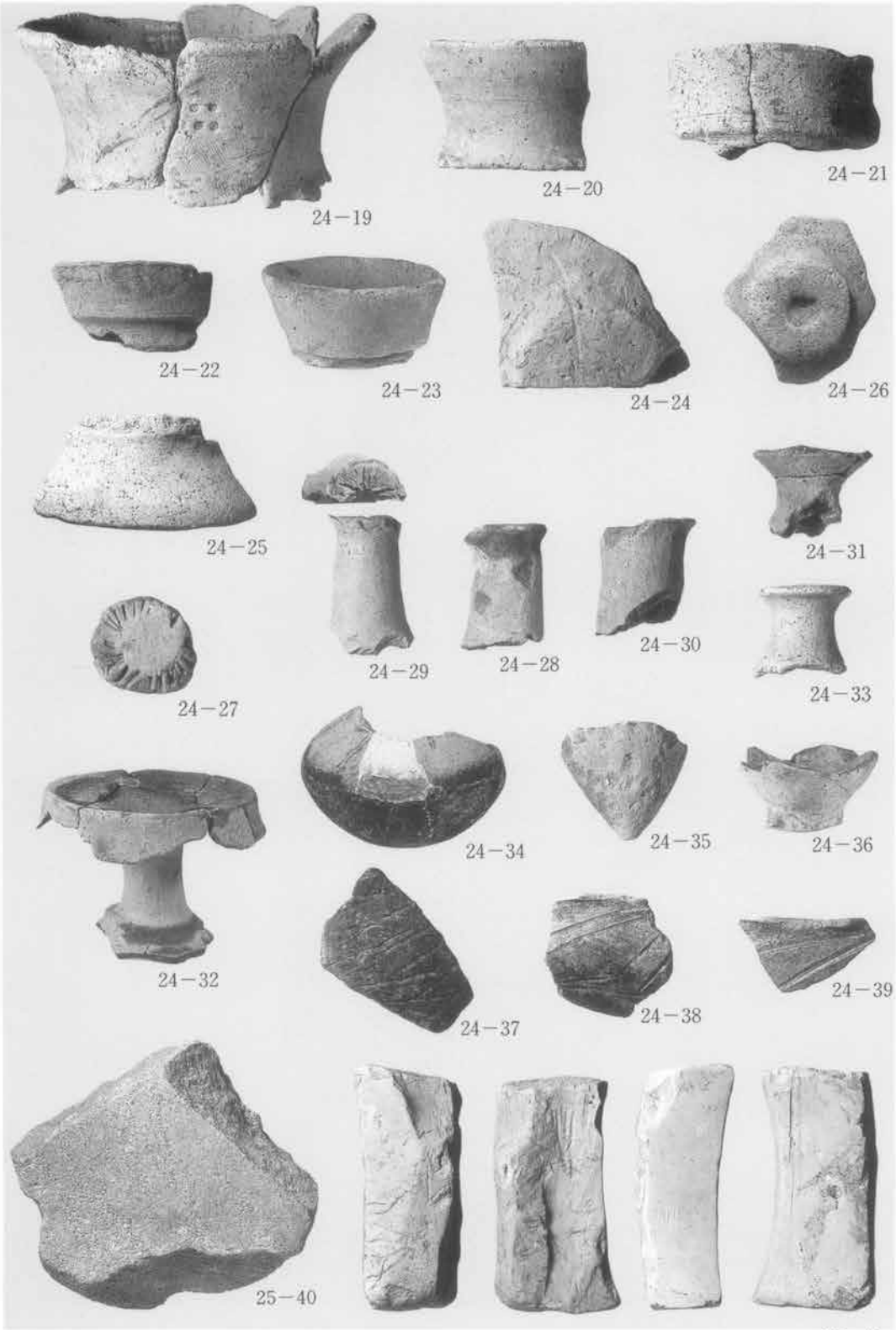
(1)　S-SE区落ち込み完掘状況

(2)　SE区完掘状況



(1)　出土遺物

番号は挿図番号に対応



(2)　出土遺物

番号は挿図番号に対応

相 川 新 遺 跡

平 成 5 年 3 月 26 日 印刷・発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町 4 丁目133番地
〒921-8044 電話 (076) 243-7692㈹

©石川県立埋蔵文化財センター　1993